

二ヶ月ほど前、奇しくもあの強欲ババアが死んだその日、都心から少し離れた場所にとある建築物が建設されていた。

総工費数十億円、国民の大事な税金を大量に浪費して、特に誰も望んでいなかった世界規模の広大さを誇る美術館が誕生したのである。

どーせ国民の税金だからと調子にのった観光庁と、不景気の煽りをおもいつきり受けてゴミ屑同然になった地方の土地を売り払いたかった不動産屋と、とにかくデカイ物を作って大きな利益を得たい土建屋。

そんな色々な奴らの思惑もあって、当初の建設計画より大きくなるだけ大きくなった美術館でもあった。

そんな美術館の庭には、主に広葉樹が生えたすでに森と呼べるほどの広大さを誇る大きな林が存在する。あく

まで林なのだ。

その中の美術館側の木の上で、鴉はタバコを吹かしていた。

その場所からさらに美術館に近づいた場所では、オープン記念のイベントが催されている。

多少、賑やかな声が聞こえてきていた。

「やあっと、オープンかよ。長かったねえ」

建設したらずぐオープンというのが普通なのだが、この美術館はオープンまでに二ヶ月という歳月が掛かっていた。

どうやら、作ったは良かったものの、展示する美術品が無かったらしい。

不手際もいいところである。

「これだから観光庁のやる事は」

お陰で、こちらは随分と待たされる事になったのだ。

フーツと煙を吐いて、鴉は依頼内容を思い返す。思い返す必要も無いくらい簡単なものだ。

今日、搬入される美術品の一つをくすねて来る。

ただ、それだけ。別に目玉の品でも何でも大量にある展示品の中の一つなので、戦闘も何もなし……の筈だったのだ。

が、現実はず違った。

軽く目を凝らして、イベントに参加しているスタッフや客を眺める。

鴉がいる場所からは若干離れているのだが、鴉の目にはどうという距離では無かった。

「あーあ、ウジヤウジヤいやがる」

その筋の奴らが、結構混じっている。恐らく紅龍会の連中だろう。

上手く変装しているが、素人ならともかくその筋の奴らには一発で分かる。物腰や雰囲気でも明らかに同業者だと感じ取れるのだ。

「どうも、依頼主は複数依頼してんな。やれやれ、ダブルブックケン

自分の首絞めてるだけだったのに」

鴉は溜息を付く。

複数依頼すれば、依頼された側同士が争うのは明白だ。複数依頼は大抵が依頼放棄される。それどころか、依頼者が報復を受ける可能性だってある。

「それが分からないって事は、よつぼどの素人か……」

耄碌もろろくしてんのか」

依頼の経路から察するに、後者が有力だった。もう一度溜息を付く。

「あー、ヤダヤダ」

そう言つて、鴉はもう一度大きく溜息を付く。

幾ら耄碌の依頼だとしても、鴉には断る事は出来ないのだ。

一度でも断れば、仕事が来なくなる。それがフリーの仕事屋の弱みだ。

「向こうも引かないし」

呟いて、変装している紅龍会の連中を眺める。

紅龍会ほどの大きな組織なら、普通は複数依頼など当然依頼放棄する。

が、放棄するどころか、向こうは明らかにこつちを意識している感じだ。そもそも、こんな簡単そうな仕事に老師である道神が自ら出張つて来ている。どう考えても訳アリである。

向こうも引けないという事だ、覚悟を決める必要があった。

「とにかく、夜だな」
そう呟いて、日が落ちるのを待った。

*

夜の帳が落ち、昼の喧騒が嘘の様に静まり返っている。そんな夜の美術館の二階の渡り廊下を、道神は歩いてタオシエンいた。

部下も続々と集まってくる。と、渡り廊下の中腹の辺りで一人の男が立っていた。

例の男だ。

軽く、こちらに向かつて手を振ってくる。

その男の格好に、道神は目を剥いた。

とてもじゃないが、気づかれずに潜入できるような格好ではない。というよりも、精神を病んでいるのではかと疑ってしまうような格好だ。

その男の格好でどうやってココまで入つて来たかは大いに気になるところだったが、道神は気にしない事にした。

とりあえず、騒ぎにはなっていない様だからだ。道神も、なみの老人ではないのである。

軽く挨拶しようとした所で、すぐ後方で爆発が起こった。

悲鳴とともに、部下が何人か吹き飛ぶ。

チツと、道神は舌打ちした。

「鴉か、派手にやりおつて」

騒ぎにならないように勤めたのだが、どうも向こうは派手にやる気らしい。

それならば相手になろうじゃないか。というのがいつ

もの道神なのだが、今回ばかりは別だ。馬鹿みたいに相手を、仕事をし、しる訳にはいかない。時間が無いのだ。

その為の、この男だった。

「頼みましたよ」

そう男に言つて、道神はその場を駆け去つた。

*

とつぷりと日が暮れて、丁度良い頃合になつた。

鴉は吸つていた煙草を捨てる。

「さて、そろそろ動くとしますか」

そう言つて、美術館の方を覗きこむ。

この美術館の二階には殆ど窓が無い。唯一、階段から展示場につながる通路にだけ開放的な広い窓が存在していた。壁全体が窓という感じだ。

丁度その正面にあたる木の上で、鴉は待機していたのである。

懐から銃と、沙羅が手に入れた見取り図を取り出し、目標の位置を確認する。

大した展示品では無い目標の品は、二階の会場の奥の隅、あまり目立たない場所にあつた。

まさか正面玄関から堂々と行くわけにもいかないの、侵入するならこの窓が絶好のポイントである。

「ま、侵入と言うには大分派手だがな」

鴉はそう呟いて、『Crow』に赤リムの方のマガジンを装填した。

一発撃ち込んだ後、脆くなった窓を蹴破ろうという算段である。

狙いを定めようと窓の方を向くと、さつきまで誰も居なかつた廊下を複数の男達が歩いてた。遠めでも目立つチャイナ服の集団、一発で何者だか分かる。

呆れたように鴉は呟いた。

「おいおい、潜入だつてのに、鬼のように目立つな」
紅龍会の連中である。その先頭を、道神が歩いてた。一応は騒ぎにならない様になっているのだろうが、随分

と堂々としたものである。

大体、目標の品一つを掠め取っていただけなのに、複数で潜入する意図が分からない。

そんな道神たちを眺めて、鴉は唸った。

「階段は一箇所だけだから……やれやれ、どうも避けては通れねえな」

通り過ぎるまで待っていたら、手遅れであるからだ。

「ここらで一つきめとくか」と呟き、鴉はマガジンを青いリムの方に装填しなおす。

もう一度狙いを定め、ピユウという軽い口笛と共にトリガーを引く。金属の弾ける音が、静まりかえった美術館周辺に響き渡った。

同時に、鴉の腕と肩全体に衝撃が掛かる。

その衝撃を支えるのと、爆音と共に窓が吹き飛ぶのはほぼ同時だった。窓が散壊し、爆煙が上がる。

複数の悲鳴が上がった。ザコを何人か仕留めた様である。

窓が吹き飛んだのを確認し、鴉は爆煙の中に飛び込む。

通るのに足りない分は足で蹴破り、廊下に侵入した。

廊下には爆煙が充満している。

鴉の目を持ってしても、手近の様子しか分からない。

まあ、いくら視力が良くても視界が塞がれているのだから当たり前なのだが。

と、手近の奴らが何人か襲ってきた。

雑兵と言えどもやはり反応の速さが違う、其処の所は流石と言うべきか。しかし、所詮は大量に消費されていくタイプのザコ共だ。鴉の相手では無い。

軽く受け流し、連射用の方で応戦する。

殆ど無駄弾を使う事無く、全員の頭を撃ち抜けたのを確認できた。

爆煙の中、自らの位置を頭に叩き込んだ見取り図と照らし合わせて確認する。一応、予定通りの位置には来れている様だ。

ともかく、問題は紅龍会の連中である。

この間しとめた奴で、単体でも戦^やれる奴はもう道神し

か残っていない筈、奴自身が出てくるだろうな……。

そう思いながら『Crow』のマガジンを赤リムの方に入れ替え、まだ晴れない煙を睨む。

と、人影が見えた。

間髪入れずに、その人影に『Crow』で打ち込んだ。

腕に衝撃が走る。

道神では無いかも知れない。が、少なくとも奴は傍にいるのだ。

詮索をしている暇など無かった。道神ほどの相手になると、多少の判断の差で命取りになる。

連射用なら牽制にもならないが、『Crow』の弾なら仕留めるとはいかなくてもタイミングによっては手傷を負わせる事が出来るはずである。

しかし、鴉にとって完全に予想外の出来事が起こった。

『Crow』の弾、四十五口径タングステン弾の増葉弾は、

鈍い音を立ててあっさり弾き落とされてしまったのである。

「マジか!」

驚愕のあまり、思わず叫んでしまった。信じられない。

しかし、それで確信する。

どうやったかは知らないが、熊をも一撃で仕留める事が出来るだろう一発を、あっさりと弾き落とした。こんな事が出来る奴は他には考えられない。

間違いなく、道神だろう。と。

「爺め！化け物ぶりが増してやがる！」

叫びながら、影に向って連射用で散射する。影の全体に当たる様に振り分けて撃つのだ。

こうすれば、どうやっても避けるのに動く必要がある。とりあえず鴉は、道神に煙の中から出てきて欲しかった。煙の中の影程度では、相手の行動が読めないのである。

しかし、完全に予想外の事が起こった。

ヒュッと風を切るいい音がして、鴉が撃った弾は、全て円状に振り払われた何かに叩き落されてしまったのである。

大理石の床に金属が叩き付けられる音がする。

流石に、鴉もギョツとする。もう一度同じように撃つが、結果は同じだ。

「んな、バカナ！」

有り得ない。コイツは道神じゃないな、と鴉が気付いた時、馴染みのある甲高い声が響き渡った。

「HAHA!!そんなハエが止まる様な攻撃では、この『Judgment 村正』の鉄壁の防御を突破する事は出来ませんYOー！」

そんな声が、爆煙に包まれている廊下に響き渡る。

その英語が混ざった非常に滑舌の悪い日本語は、確かに何処かで聞いた事があった。

背筋に冷たいものが走る。

英語が混ざった滑舌の悪い日本語、複数の弾丸を一瞬で叩き落とす芸当、そして『Judgment 村正』……。

それらのキーワードが当てはまる人物に、鴉は一人だけ思い当たったのである。

そんな、バカナ……いや、こんな芸当が出来て、この

怪しげな日本語。間違い無い。

「お前、もしかして……」

姿が捉えられるくらい煙が晴れてきて、向こうも気が付いた様だ。G.パンにスカジャンにサングラス、そして金髪で草履を履いた男が言う。

「OHーYouはマサか……」

同時に叫んだ。

まさよし
「正義・アンダーソンか?」

「クロウでス[kai?]

不本意ながら、綺麗にハモってしまった。

*

アンダーソンは酷く驚いているようだった。薄い色のサングラスの向こうで、目をパチクリさせている。だが、それは鴉だって同じだ。

驚いた。酷く驚いた。何でこのタイミングでコイツ

が？何故コイツが紅龍会と行動を共に？

色々と疑問点はあったが、まず言った。

「お前、何で日本に居るんだ？」

「観光でス」

即答された。

観光なら何でこんな事やってんだ？と思ったが、みなまで聞くのは止めておく。

どうせ、常人には理解出来ない理由に違いない。

アンダーソンと鴉は知り合いだった。仕事でメリケンに行った時に、依頼主に一緒に仕事をさせられたのである。感想を言えば、デタラメな生き物だった。

金髪のオールバックに怪しげなサングラス、昇り龍の刺繍の付いた真つ赤なスカジャンに『柳生』の刺繍の付いたシャツ、裾がまるで胴着の袴の用に広いGパンに草履。そして、勘違いした様にベルトに差してある大小の刀。

その格好だけでも十分デタラメだったが、アンダーソンの本当のデタラメさはそんな物では無い。

アンダーソンがどれだけデタラメな生き物か、説明するならば『弾丸を拳銃から放たれた後に肉眼で確認してから回避する事が出来る』というのが一番分かりやすいだろう。

それだけで、どれだけ普通の人間とはかけ離れた生き物かが分かる。

鴉はアンダーソンをげんなりと眺めた後、言った。

「どうせ、お前また騙されてんだろ？通せよ」

馬鹿だから、よく騙される。

一緒に仕事をしたときも、騙されて一度敵側に寝返ったりしていた。

その時は、敵の嘘八百を真に受けたアンダーソンに鴉は殺されそうになったのである。

まあ、すぐに騙されたと気がついて騙した連中を皆殺しにしていたが。

自称正義の人であるアンダーソンが、まともに仕事の説明をされて紅龍会と手を組んだりするはずがない。

恐らく、いや、間違いないで騙されている。

が、アンダーソンは鴉の話などまったく聞いておらず、何やらブツブツと呟いている。

「そうですか、まさか鴉とはクロウの事だったとハ……」

何やら一人でヒートアップしている様子だ。
嫌な予感がした。

「おい、アンダーソン？」

「非常に、残念Does」

アンダーソンは悲しげに首を振り、さっきまで抜いていた小刀をベルトに差した鞘に納め、長刀の方を抜いた。音もなく、流れるように鞘から刀が抜かれる。

その青い刀身は、まるでしつとりと塗れているかの様に艶やかで、一種の神聖さまで感じさせられる。

素人目でも明らかな、確実に名刀の部類に入る刀だ。それを、鴉の方に向けた。

「お、おい……」

「クロウ、まさかYOUがその様な男だとは思いませんでした。罪も無い一般 people を無残に虐殺しまくる

とハ……私は YOU の所業を許す事が出来ません！

YOU は私と同じ正義ジャスティスの男だと、尊敬に値する男だと

believe していたのNiーもと同胞として、せめて私が鍛えたこの刀『Justice 正宗』のサビとしてくれマSuー」
軽く涙まで流している。

どうもアンダーソンの中で、話が勝手に進んでいる様だ。それも、あんまりありがたくない方向に。

鴉は慌ててアンダーソンを制した。

アンダーソンに殺されなかった時の嫌な映像が、まるで昨日の事のように思い返される。

「おい、アンダーソン。落ち着け」

「Answer も Question も Nothing!!」

問答無用、と言いたいのだろうと辛うじて分かる言葉を叫んで、アンダーソンは視界から消えた。

喉元に、冷たい物が走る。

チツと舌打ちして、間髪入れずに鴉は後ろに跳んだ。

同時に、若干首を後ろに引く。

直後、鋭利に風を切る音と共に、さつきまで鴉の首があった位置でアンダーソンの『Justice 正宗』刃が空気を切った。

ピツと、鴉の首から血沫が飛ぶ。

間一髪である。首の薄皮一枚持つていかれた。体勢を立て直しながら距離を取り、毒づく。

「俺の目で追えないとはね」

鴉は、今のアンダーソンの動きを目で追う事がまるで出来なかった。

勘でよけたのである。

その事に、鴉は相当な焦りを感じていた。

相当な技量を持った相手でも、鴉が相手の動きを目で追えなくなることなどまず無い。

昔から鍛えられている鴉の目は、特注品と言っている体が付いて来るかどうかは別としても、どんな動きの速い相手でも目でだけは捕らえおく自信が鴉にはあった。実際、前一緒に仕事をしたときのアンダーソンは目で追うことが出来たのである。

だが、今は出来ない。

しばらくの間に、アンダーソンの化け物ぶりがまた増したようだった。

アンダーソンにもそれが分かった様で、鴉と2・3Mの距離を保ったまま微笑した。

余裕の笑みというやつである。

「バケモノが、さらにバケモノになりやがったか」

そう呟きつつ、対峙しているアンダーソンに散射した。鴉お得意の、敵全体を捉える様に撃つやり方だ。

が、アンダーソンが刀を弧を描くように振るだけで、

その全てが叩き落される。

「テキサス柳生防御の法、その one 『田斬』！その様なひ弱な弾丸では幾ら撃つてもHitなどしません！」

『田斬』ね、そのまんまじゃねえかよー！

そう叫びながら何度も散射する。

流れ弾を喰らって飾られていた美術品の数々は見事に碎けていくが、一発としてアンダーソンに当たりはしない。

放たれた銃弾のことごとくが、『田斬』によって弾き落とされるのである。

「ハッハッハ！ テキサス柳生にとつて Gun など、恐るるに足りませーんー！」

テキサス柳生、その歴史は浅い。恐らく、誕生して三・四年ほどしか経っていない。正義・アンダーソンが『Great! 柳生十兵衛』という漫画を参考にして作った剣術である。

平たく言えば、アンダーソンの我流だ。漫画の無茶な動きを、アンダーソンの驚異的な肉体が実行している。ただ、それだけの事である。

つまり、アンダーソンは天才なのだ。なるべくなら相手などしたくない。

「クソが、アンダーソン！ お前、騙されてるって言うてるだろー！」

牽制の為に銃で撃ちながら再度言ってみるが、効果は

無いようだ。

例の「Answer も Question も Nothing!」という意味を読み取るのが難しい言葉を叫び、またも鴉の視界から姿を消した。

やはり、目で追うことが出来ない。

まるで、梓淵の狭い窓からアンダーソンを覗いているかのように、視界の枠の外へアンダーソンが消える。

そんなアンダーソンの太刀をまたも薄皮一枚の勘でかわし、銃のマガジンを交換しながら鴉は再度毒づいた。

「ガッツリ洗脳されてやがる」

アンダーソンは正義バカだ。その為、正義の仕事だと言うとコロツと騙されてしまう。

頭は悪くないので（多分）、騙されていると指摘するとスグに気付くか、考える位はするのだが、今回は道神に相当吹き込まれているらしい。

苦し紛れの叫びでは、まったく聞く耳を持ってくれない。

またアンダーソンが視界から消えた。チリチリと、こ

めかみの辺りがむず痒くなる。

しゃがみながら大きく横にステップ、頭の上ギリギリの所をアンダーソンの刀の刃が掠めた。

背筋が凍る思いだ。

さつきから、勘だけでアンダーソンの刀を避けている。

鴉の長年の経験から来る優秀な勘だが、所詮は勘だ。

いつまでも頼りに出来るものじゃない。

鴉は常に散射を繰り返して距離を保ちつつ、片手で頭をかきむしる。

「チツ、まともに相手をしてるんじゃない道神に先を越さ

れるんだが……仕方ない」

連射用の銃で弾幕を張りつつ、後退する。

「逃しません！」

アンダーソンがそれに気付き、弾幕を弾き落としながら接近してくる。

だが、弾幕を弾きながらなので自慢の足をフルに使えないらしい。十分視線で追う事が出来る程度の速度だ。

よし、いける。と、鴉は思った。

後退しながらの連射なので、弾幕がアンダーソンに届いて弾かれるまでに若干のタイムラグができ、その間に少しずつ弾の弾幕の量を増やす事が出来る。

それによって弾数が増え、アンダーソンが弾をさばきれなくなり、銃弾に当たるのを待つのだ。あくまで、気持ちの上では。

しかし、銃弾の速度は基本300〜360m毎秒。鴉が、ちよつと頑張って後ろに下がったからと言って、アンダーソンに当たる弾数が増えるはずがない。

そんな夢物語はやはり通用しないのだ。

実際のところ、アンダーソンが弾にてこずっている間に必要なだけの距離を取ろうじゃないか、というのが目的だ。

無論、アンダーソンが弾幕を足で交わしたら出来ない戦法だ。だが、アンダーソンの性格からしてそれは無いだろうと鴉は踏んでいたのである。

アンダーソンが次々と来る弾幕にてこずって前進が遅れている間に、残りの手で『Crow』を取り出した。

持っていた連射用の銃を手から落とし、『Crow』を両手で構えて叫ぶ。

「静まれ、メリケンが！」

アンダーソンに弾かれた弾の音や、流れ弾によって割れたり台座から落ちたりする美術品の音が、撃鉄と銃声の音に呑まれた。

あまりの早業の連射だったのでまるで一つの音に聞こえるが、三発だ。

鴉は『Crow』を三連射したのだ。四十五口径、タン

グステン弾の増薬弾^{マツナム}、その連射である。

コイツが駄目なら、後は何をしてでも無駄というものである。

酷い衝撃に、腕と肩が音を立てて軋み、右の肩にまるで肩が抜けた様な痛みが走った。

抜けてはいないだろうが、しばらく右腕は痺れて使えないだろうという痛みだ。

しかし、そうまでして連射した三発は、一発がアンダ

ーソンの肩を掠めただけで残りは叩き落されてしまう。いや、ただ叩き落とされただけなら良い。刀にダメージを与えたかったのだから。

だが、タングステン弾を叩き落したというのに、アンダーソンの『Justice 正宗』は刃こぼれ一つしていない。計算外だった。

「主人も化け物なら刀も化け物かよ」

そう呻いて、鴉は必死でバックステップした。

アンダーソンの『Justice 正宗』の刃が、またも鴉の首筋を掠める。

鴉の首筋に出来た一つの切り筋から、ツーツと血が流れた。

さっきの連射の影響でまだ痺れる右腕を押さえながら、舌打ちする。

鴉の計算では、いくらアンダーソンの刀といえタングステン弾の連射を弾き落としたのでは刃こぼれ位するだろうと踏んでいた。

だが、アンダーソンの刀は鴉の予想を超えて強靱だっ

た。

今まで何度も弾幕を叩き落とし、タングステン弾を二発連続で叩き落したというのに刃こぼれどころか痛んだ様子さえ無い。しかも、こっちはさっきの連射でしばらく利き腕が使えない。

絶対絶命と言つてよかった。忌々しげに鴉は呟く。

「持ち物は主人に似るとはよく言つたものだ。ん？ちよつと違つたか？」

もう、失笑するしかない。

右腕を押さえながら、アンダーソンから距離を取ろうと後退する。

が、左腕が使えないのだ。勿論、弾幕も張れない。

アンダーソンの足にとつては、弾幕の無い鴉の後退など一瞬で追いつけるものだ。右腕が痺れて使えない鴉にもはや為す術は無い。

だが、アンダーソンは追つてこなかった。鴉の三連射も、無駄にはならなかったのだ。

掠つただけとは言え、タングステン弾である。

強靱なアンダーソンの体といえど、その衝撃はこたえたのだ。

苦し紛れに一太刀浴びせたが、アンダーソンも衝撃から回復するには多少の時間を要した。

その間に鴉は十分距離を取り、右腕の痺れもなんとか撃てる程度に回復している。

鴉が十分に距離を取つた所で、アンダーソンは不敵に笑つた。

「さすが、クロウ。easy にはいかないと思つていましたが、やりますNo!」

「お前相手じゃ、こつちも死に物狂いなんadena」
お互い、深く息を吐く。美術館の廊下に、緊張感の漂う静けさが訪れる。

そんな中、鴉は依然として焦っていた。

何とか距離を取つてはみたものの、実際鴉は手詰まり状態であつた。

散射しても叩き落されるし、弾幕の層を増やしてみた所で多少足を止めるのみ。頼みの『Crow』の一撃どこ

るか連射でさえも叩き落され、刀には刃こぼれ一つ付かない始末、どうしろって言うんだよ……。

改めて、正義・アンダーソンまじしという男の恐ろしさが実感できる。

一本道であるこの通路で出来そうな戦法を、鴉はすでに試ききっていた。

少し、考える。

『Crow』の青リムで、天井を打ち落としてみるか？いや、駄目だな、そんな事してる間に切られるのがオチだ。大体、出来たとしても奴のあの足じゃあ、下敷きどころか、掠めもしない。足止めすら出来ない。

そう、足だ。足が問題だ。アレが奴の大きな武器だ。

「だが……」

そう呟いて、鴉は唸る。

あの足を止めれば良いと思ったが、どうもそれじゃ足りないらしい。

そうなのだ、足を止めた所で何発打っても叩き落され

る。力押しで行っても、タングステン弾の三連射でアレでは、力押しなど不可能だ。

「あれ以上の連射は、どうも出来そうに無いしなあ」自分の右腕を眺める。まだ、ちよつと震えていた。

どう考えても、三連射以上は無理だった。

「左腕だけで撃てりゃいいんだが、それじゃ狙いが定まら……」

言いかけて、舌打ちする。段々、考えが袋小路に入っている。

無いものねだりしても仕方が無い。何か考えんと死ぬぞ。

そう自分に活を入れると、鴉は最初にアンダーソンが言った言葉を思い出した。

「HAHA!そんなハエが止まる様な攻撃では私には当たりませんYO」というものだ。

つまり、ハエが止まるような速度で無ければ良いのだ。弾が加速すれば良い。

だが、それは無理である。今から弾に火薬を追加する

わけにもいかないし、元々コレは増薬弾だ。これ以上の速度など望めるわけが無い。

「だから、無いものねだりは止めようや……」

発想を切り替える。つまり、ハエが止まるような速度でも当たるような位置にいれば良いのである。そう、近距離だ。

だが、刀を使って戦う事からも分かるように、アンダーソンは白兵戦に特化している男だ。

かく言う鴉は銃使い。遠距離向きである。

アンダーソンに鴉が接近戦を挑む事、それは自殺行為に等しかった。しかし、その時の鴉にはそれがとても良い考えに思えたのである。

「近づいてみるか」

そう呟いて、鴉は駆け出した。

*

アンダーソンは今、何とも言えない高揚感を覚えている。清々しいとすら言える。

それは、スポーツ選手がスポーツで良い試合をしている時の感覚に似ていた。

最近のアンダーソンの仕事で対峙する相手は、どれも見掛けばかりの奴らであった。

大抵の場合、一瞬で勝負を決してしまう。緊張感を感ずる事さえ出来なかった。

そして今、久しぶりに仕事で緊張感を覚えている。

鴉とは以前に一緒に仕事をした事もあるので、アンダーソンはその凄さは身をもつて知っていたが、対峙してみても始めて分かる恐ろしさがあつた。

切つても切つても、紙一重で躲される。

叩き落しても叩き落しても、休ませずに撃ってくる。

間が、無い。

一体どのタイミングで新しいマガジンに交換しているのかと、アンダーソンは思う。

しかも、ただ無駄弾を撃っているだけではない。次に

繋がる弾なのだ。

一体どんな行動に繋がる動きなのか、恐ろしくもあり、
楽しくもあった。

ビリビリと、常に痺れるような緊張感があるのだ。心地良い。

アンダーソンは戦闘では高揚するタイプだ。ギリギリの戦闘であればあるほどである。

正義だ Justice だと喚いてはいるが、基本的には根っからの戦闘好きなのだ。

だからこそ、高学歴であるにも関わらず「悪を滅ぼす」などと言ってこの職業に付いている。

恐らくこういう奴が、平和であっても耐え切れずに革命を起こそうなどとするのだ。

正義の名を上げて。

そういう意味では、アンダーソンがこの職業を選んだのは多くの人にとってありがたい事であったかもしれない。

心地よい緊張を噛み締めながら、アンダーソンは呟く。

「Excellent デス。分かってはいた事デスが……クロ

ウは素晴らしい！彼を切 Ru のはとてもツライ、ですが……」

道神クオンエンに教えられたクロウの悪行の数々を思い返す。

勿論それは道神によって教えられた嘘八百であるのだが、アンダーソンには分からない。

ギツと唇を噛んだ。

「悪は、叩き切らねばなりません」

悪であるならば、誰であっても叩き切らねばならない。アンダーソンの信条だ。

悪は滅ぼすべき物なのである。

アンダーソンは、間違いなく正義の人であった。ただ、色々と馬鹿だけに間違った方向に転がっていつてし

まっているだけで、米国人メリケンの血がそうさせているのかも知れなかった。

かの国の伝統、盲目的正義である。

実際の場合、殆どが大悪党になっている場合が多いが……まあ、いずれにせよ。アンダーソンは正義の人なのである。

「クロウ……」

鴉と向こうで共に潜ってきた死地の思い出などを思出し、アンダーソンは涙した。

涙もろい男なのだ。

涙を流しながらも、アンダーソンは冷静に状況を分析している。

鴉にはもう打つ手が無いのだろうと、アンダーソンは感づいていた。

次、次に動き出したとき、その時に勝負を決するでしょう。残念ですが、鴉、その時であなたとはサヨナラ

です。

アンダーソンがそう思って身構えるのと、鴉が駆けだしたのは殆ど同時だった。

*

鴉とアンダーソンが激しい戦闘を繰り広げる中、ただ巻き添えを食わないように隠れながら見ているだけだった奴らもいる。

紅流会の下っ端どもだ。彼らは常に群れている。

というより、基本的に複数で仕事を行うことになっているのだ。

いわゆる修行中の身の彼らは、鴉やアンダーソン、道

神シメンなどの様に単独で大きな仕事をこなす事は出来ない。

勿論、一般人と比べれば遙かに戦えるのだが、鴉レベルの奴らの相手をすれば時間稼ぎすら出来ない連中なのだ。

雑兵、どこぞの子供向け特撮アクション風に言えば

戦闘員シヨツカという言葉がぴったりとくる。

紅龍会の仕組みでは誰もが下つ端から始め、才能のある奴が道神のような老師の弟子となる。

その時からやつと、単独での仕事が許されるのだ。

その点から言うと、彼らは下つ端としては歳を食い過ぎていた。偵察で鴉を相手にした男の方がよっぽど若かったほどである。

つまり、才能が無いのだ。今でも見捨てられずに下つ端として居られるのは、壁としての価値がまだあると判断されたからだろう。

まあ、廃棄処分目前なのは言うまでも無いが。

「おい……いいのか？俺らこんな所でただ眺めてて、あの金髪の奴に手を貸さなくていいんかね？」

そんな才能がない下つ端の一人である少し細めの男、

張^{チャン}がそう言う。

と、その横にいた少し太めの男、白^{ペク}はその言葉を鼻で

笑った。

「そう思うんなら、行ってくればいい」

そう言うって、白は親指で鴉達の方を指さす。

「まあ、お前が言ってもコンマ数秒となく蜂の巣か細切れにされるだろうがな」

そう言うってニヤニヤと笑っている。

「……確かにその通りだが、お前だって同じだろうが」
張はちよつと気に障ったらしく、不機嫌そうにそう言った。

が、白にとつては大して気にするような事でも無いらしい。

「ああ、その通りだな。だがな、あんな化け物どもとまともに戦えなくても俺はショックでもなんでもないね」

そう、軽く鼻を鳴らしている。

切った張ったでナンボのその筋に生きる人間としては、腐りきつていると言えた。

雑兵根性丸出しだ。普通、少しでもプライドを持つなら多少は戦う意志を見せるべきである。

張もそう思った。呆れながらも一度、鴉とアンダーソンの戦いを見る。

と、丁度アンダーソンが『円斬』で弾を叩き落としていた所だった。雨のように降りかかってくる弾丸を、一降りで全て叩き落としていた。

それを見た瞬間、張は今まとまった自分の考えを撤回した。

確かにアレは無理だ、と。

情けないやら虚しいやらで張は少し下を向いて黙っていると、白が声を掛けた。

「まあ、気にすることは無い。道老師^{ミチノカミ}だって二人が戦^やりはじめたら手を出さずにただ見てると仰つたじゃないか、実際無理だろ？ありやあ」

「……確かにそうだな、そうだよな」

そう言つて、二人の下つ端は顔を見合わせて苦笑した。めでたく、張も根性まで雑兵そのものに成つたのである。

「お、動くぞ」

と、別の奴から声が掛かる。

二人の雑兵が同時に鴉達を見ると、鴉が駆け出したのはほぼ同時だった。

*

鴉は駆け出していた。

右手には『Crow』を握りしめ、アンダーソンに向かって駆けていく。

幸いな事に、アンダーソンはこちらを見据えて身構えるだけで動こうとしない。待ち受けて勝負を決するつもりなのだろう。

そのサングラスの向こうの目で、鴉の動きをしっかりと捉えているのが分かる。

鴉にとつては、全くもって好都合だった。

今まで散々手を打ってなんとか作つたアンダーソンとの距離を、一気に詰める。

「コイツは……一種の賭だな。まったく、俺には賭ごとは性に合わないんだが」

駆けながら、鴉は小さく呟く。賭け事があまり好きではないのだ。

しかし、こんな世界に生きているのだ。毎日が賭け事のような物である。

「……腹くるるか」

鴉にもその位の事は分かっていた。というより、慣れているのであろう。

だからこそ、あっさりと腹をくるる。

「頼むぜ、今日二発めえ」

そう呟きつつ、右手のみの動きで『Crow』のマガジンを青リムの方に変える。

その時既に、鴉とアンダーソンの距離は二間も無いほどだった。

それは、アンダーソンにとって絶好の間合い。鴉を絶対に仕留められる間合いである。

アンダーソンにとっては、鴉が自殺行為に出た様にし

か見えなかった。

「クロウ、サラバ Dees！」

少し寂しげなその叫び声と共に、アンダーソンの姿がブレる。

アンダーソンを見失う前触れ、アンダーソンの一閃が襲う前触れだ。

この距離である。見失ったら首を切られて終わりである。だが、鴉もわざわざ首を切られに来たわけでは無い。

「化け物が、そうそう何度も見失うかよ」

吐き捨てる様に鴉はそう言い、床を蹴って跳び上がる。そのまま空中で反転しつつも、目だけはアンダーソンを追っていた。

アンダーソンは速い。常人、いや、腕の良い同業者でも普通は見失ってしまう。

しかし鴉とて、アンダーソンを見失ったらただ勘で避けるだけに終始していた訳では無い。鴉も、並では無いのだ。

ブレていくアンダーソンの動きの先を、しっかりと視線で追いかける。

少しづつではあったが、鴉はアンダーソンの姿を追えてきていたのである。

加えて、この近距離でアンダーソンが狙うのは首ときている。自然、アンダーソンの動きもある程度予測できていた。

そして、鴉の目は。鴉の首から右斜め上、其処から襲って来るアンダーソンの一閃の姿を捉えていた。

「頼むぜ、恋人！」
ハニー

鴉はそう叫んで、伸ばしていた右手に持つ『Crow』を振り上げる。

鴉の体は丁度頭が床の方を向く様な状態だったので、鴉からすれば振り下ろす様な感じだ。

しかし、目で捉えたアンダーソンに鴉が銃口を向けて撃つよりも、アンダーソンの一閃が鴉の首を捉える方が

明らかに速い。

そうして、アンダーソンの『Justice 正宗』が鴉の首をいとも容易く胴体から切断する。

筈だった。

「OH-」

と、アンダーソンが驚愕する。

アンダーソンの『Justice 正宗』が、鴉の首を目前にして空中で止まっていた。

鴉の首を捉えるより僅かに前に、鴉は『Crow』の銃身で『Justice 正宗』の刃を受け止めていたのである。

賭に……勝ったな。

鴉はニヤリと笑うと、『Justice 正宗』の刃を受け止めたまま、体が空中で下を向き『Crow』の銃口が床を向いた状態のまま……。

『Crow』の引き金を引いた。

*

「OH-」

思わず、アンダーソンはそう叫んでしまっていた。それもそのはずだ。

絶好のタイミング、絶好の間合い、絶好の速度ではなつた筈の『Justice 正宗』の一太刀が、銃程度に軽々と受け止められてしまったのである。

刃が受け止められてしまうなど、アンダーソンが『Justice 正宗』と『Judgment 村正』を愛用し始めてからは初めての事であった。

今までならば、その銃ごと切り捨てていたのである。いや、剣であつてもだ。

それだけに、アンダーソンにとっては驚愕の出来事であつた。

普段の冷静なアンダーソンであつたなら、すぐさま銃ごと鴉を弾き飛ばしていたであろう。

受け止められてしまったとしても、状態から言つてアンダーソンが圧倒的に有利であるのだからすぐさま畳み掛ければ良かったのだ。

しかし、その時のアンダーソンにはそれが出来なかつ

た。一瞬だが、完全に呆けてしまつていたからだ。

アンダーソンが我に返つたのは、鴉が勝ち誇つた様な笑みを見せた時であつた。

だが、その時既に鴉は床。つまり、アンダーソンの足下に向かつて銃の引き金を引いていたのである。

撃鉄音が走る。

「Shit!」

そう叫んで後退するがはやいか、アンダーソンの視覚と聴覚は飛んだ。

ついでに、サングラスも吹き飛ぶ。

近距離での激しい爆音で聴覚は音に吞まれ、キーンという甲高い音しか聞こえてこない。視覚の方は、ブラックアウトしていた。

爆風を受けながら、アンダーソンは後退する。

視覚がやられたのは瞬間的な事だった様だ。すぐに、視界が戻つてきた。

と同時に、足下の爆煙も多少はれてくる。床の様子を見て取れる事が出来た。

「……」

思わず、アンダーソンは口笛を吹く。

アンダーソンの足下に出てきた物は、下の階まで突き抜ける大穴だったのである。

アンダーソンの背筋に、久しぶりに冷たい物が走った。

「Fu-m、命拾いしました……コレを、Normalに喰らったらちよつと危なかったデスNe!」

そう言つて、アンダーソンは息を吐く。

確かに危なかったDeス。しかし、コレはクロウにと

つては一種のgamble^{カケ}だったはず、ならばもうクロウに

は打つhandは無いはずDeス。

「次々、FinishデSu!」

そう呟いてアンダーソンが落としたサングラスを拾

おうとした、まさにその時であった。

*

耳を占領していく様な撃鉄音と爆音が同時に聞こえ、体が中に浮かぶ。と同時に、音が僅かながらも遠ざかって行く。

鴉の体が、瓦礫に混ざつて吹き飛ばされていた。

踏ん張りなど効くはずも無い空中で、鴉は大理石風にコーティングされた床に向かって『Crow』の撃鉄を引いたのだ。

腕から肩に掛けてだけを無理矢理押しやられる様な力が、鴉を突き抜けていく。

天井に向かって、鴉の体が加速したのである。

「ガッ———」

思わず、呻いてしまう。

鴉にとつても、銃の反動だけで飛び上がるなど初めての経験だったのだ。

こ、コイツは……無えな、ありえねえ。

そんな風に、鴉は多少後悔した。いつ意識が飛んでもおかしくない痛みなのだ。

だが、それで次の動きを失敗するわけにはいかい。

それでは、賭に負けるのだ。

「どうせ今ので潰れちゃくれねえんだろうしな、あんにやるは」

だったら、どんなに良いだろうか。

衝撃で乱れた体勢を、歯を食いしばって立て直し反転する。そのまま、丁度両腕で『Crow』を構えた体勢で天井に着地した。

靴で天井にグリップを踏む、そして。

天井に着地した鴉の視線の先……其処には、アンダーソンの背中があった。

鴉の顔から思わず笑みがこぼれる。

「バッチリだ」

本当に、鴉にとって予想した通りのバッチリの状況である。

鴉は、接近で撃てばアンダーソンを何とか出来るとは思っていないかった。

接近し撃ったところで、自分も叩ききられるだろうし、下手をすれば自分だけがやられると鴉は分かっていた。

あくまで接近は突破口、始めから鴉は背後を取るつもりだったのである。

さしもの化け物アンダーソンも背後、しかも予想できない上からなら避けられはすまいと鴉は踏んだのだ。

しかも、その考えは的外れでは無かった。

事実、アンダーソンは今完璧に鴉を見失って無防備な状態だ。アンダーソンほどの化け物であっても、相手を捉えているのは視覚であるという証拠に他ならない。

そして今、そのアンダーソンは鴉を視覚で捕らえていない。

完璧だった。

「じゃあな、メリケン」

そう呟いて、鴉はもう一度『Crow』の撃鉄を引いた。

今日三度目になる青リムの撃鉄音が走る。

若干落下する傾向を見せていた鴉の体が衝撃によって再度天井に叩き戻され、さらに押し込もうとする。

まるで、鴉の足が天井に押込まれていくかのようだ。が、そんな衝撃に耐えながら、鴉は信じられない物を

Nai

そう言って、アンダーソンは懐かしそうに微笑した。

「一度、お答えした Question『Des Yo-c.』」

そう言って、アンダーソンは足下に落ちていた自分のサングラスを右足で軽く蹴り上げた。

アンダーソンのサングラスは綺麗な弧を描き、スポット音がしそうなほど見事に本来あるべき位置へ戻る。

その間も、鴉の首筋に当てられている『Justice 正宗』の刃は微動だにしない。

その様を眺めて、マズいな、と鴉は思った。

この馬鹿、馬鹿のくせに隙が存在していない。化け物みたいな腕があるんだから、ちったあ増長ぐらいしろよな……。

普通、腕の良い奴は自分が完全に有利なときは増長して注意が逸れる時が多い。それが絶好のチャンスなのだが、アンダーソンに限ってはそれを期待できそうも無かった。

「あー、そういう前にも聞いた事があったような……」

そう呟いて、鴉は思い出す。

昔、といつても一年有るか無いかの話ではあるのだが、メリケンでアンダーソンと組まされて仕事をしていた時に、似たような質問をした事があったのだ。

確かその時は、目隠しをされて弾を避けていたような……まあ、とにかく。その時のアンダーソンの答えは確かこうだった。

『裏 空気が Succeed していきます』

とかなんとか、その後色々詳しく聞いて、音とか微妙な振動とかを察知して避けているって推測に至ったっけか？

それも、脊髄反射のレベルで。

「……なるほど、愚問だったか」

過去の回想が終わり、鴉はガツクリと肩を落とす。

アンダーソンが化け物の中でも、反則級の化け物だった事を思い出したのだ。

そもそも、背後を取れば殺れるという普通なら普遍とも言える定義に、アンダーソンを当てはめようとしたのが間違이었다のであろう。

「おいおい……じゃあ、どうしろっつーんだよ」

自分自身の考えに、鴉は小さく突っ込みを入れる。

そもそも、それすら駄目だったらなら鴉がアンダーソンに勝てる道理は無いのだ。

この、ただひたすら真っ直ぐなだけの廊下では。

「逃げるしか無かったのかねえ……アホか」

そう、毒づく。

少なくとも、この廊下でアンダーソンを仕留めようとしたのは間違이었다のであるうと、鴉は後悔した。

なるほど、終わってみれば立派な鴉の判断ミスである。

「懺悔は済ませマシタ Kaç」

そう、アンダーソンは言ってくる。

どうやら、今の時間は鴉の懺悔の時間だったらしい。

見逃してくれそうも無いな……。

「あいにく、懺悔が出来るような神様が居ないんでね……」

そう呟いて、鴉は堂々と懐から連射用の銃を取り出す。が、あっさりとアンダーソンの『Justice 正宗』によ

って真つ二つにされてしまう。そしてすぐさま首筋に

『Justice 正宗』の刃が戻ってきた。

分かっていた事である。試してみただけだ。

「ありゃあ……」

「クロウ、Accepts defeat with bad grace nu~fu~」

つまり、『往生際が悪いですよ』と言っただ。

英語だけで言っただけで鴉を挑発してきている。余裕な事である。実際、アンダーソンが余裕なのも当然だった。

自分の刀が鴉の首筋を捉え、しかも鴉には獲物が無いのだから。

「クロウ、それではもう未練はNothingです Neç」

そんなわけは無い。鴉は肩を竦めて言った。

「タンマ。取りあえず、一本吹かしていいか？」

「Of course (勿論)」

了承を貰って、鴉は懐から取り出したタバコに火をつける。

鴉にしては珍しく大きく吸い込み、長々と吹かした。無論、最後のタバコを長く楽しむためでは無い。

天井に上っていく煙をぼんやりと眺めながら、鴉は思う。

さて、どうしようか？奇襲攻撃して逃げるにしても獲物は無い。大体、あったって逃げられるとは思えんな。素手で戦うなんて論外だし……。

鴉は向こうの森で熊にでくわした時にアンダーソン

が素手で熊を仕留めたのを思い出し、身震いした。

とにかく、もう依頼はどうでもいいからこの場は逃げねえと……。

アンダーソンと戦っていた時間を考えると、道神が

目的の品を手に入れていない可能性はゼロに等しかった。もう、依頼などに構っている場合では無い。

そもそも、何故俺はこんな化け物と戦わにやならんだ？

おかしいだろう？と、鴉は思う。

そうなのだ。本来ならアンダーソンと鴉は戦う相手では無いのである。今回アンダーソンと鴉が戦わねばならなくなったのも、アンダーソンが道神に騙されているからなのだ。

一回タバコを口から外し、煙を吐き出す。鴉の吸っているタバコの火が、根元まで迫ってきていた。

それが、鴉に残された時間でもある。迷っている暇は無かった。

「あー、結局、アレしか無いかな……」

そう鴉は呟き、タバコを捨てる。

「クロウ、もういつの De ス Ka?」

「ああ、いいよ」

鴉の考えでは、日本かぶれ（とっても間違っではいるが）でもあるアンダーソンならこのままバツサリとはいかないはずだった。

「では、絶世の句を」

もったいぶってそう言うってくる。予想通りであった。

「あー、特には無いが、一つ分からないことがあるんだ。質問してもいいか？」

「OK」

鴉はチラッと『Justice 正宗』を見る。水が渡っている様に艶やかなその刃は、鴉の首など軽く撥ねてしまえる様に見える。

軽く息を吐いて、鴉は色々と邪魔な感情を吐き出した。

「あのなあ……何でアンダーソンみたいな正義の男が、紅龍会の様な悪の組織に荷担するんだ？それが不思議でならないんだが？」

正義だとか、悪の組織だとか、歯が浮いて残らず出て行ってしまいそうな台詞だったが、至って真顔で鴉は続ける。

話の内容さえ聞かなければ、誰が見ても真剣に、本当に疑問に思っているように見える。

そんな鴉の態度とその言葉に、アンダーソンは戸惑い

を隠せなかった。

「ク、クロウ！助かりたいからって You はそんな恥

知らずな事を言うのです Ka？紅龍会は^{正義}Justiceです！

悪は You でシヨ？」

と、非常に慌てた様子でアンダーソンは言うってくる。

その声を聞いて、鴉はアンダーソンに分からないようにほくそ笑んだ。

戦闘中ではまったく聞く耳も持っていなかったが、じっくりと、それでいて至って真面目に鴉が言っているの
で動揺しているのだ。取りあえず、聞かせることは出来
ている。

後は口先の問題だな、と鴉は思った。

「俺が悪？何故だ？」

堂々と聞き返す。この時、心の中では鴉は爆笑していた事は言うまでも無い。

「で、ですから、道神が言うには China の place で workをした時、無抵抗の民を口封じに……虐殺したの

でショウ？」

アンダーソンは既に自信が無さそうにそう言う。

鴉はアンダーソンの話を聞いて、あまりの馬鹿馬鹿しさに呆れ返った。

おいおい、そんな具体性も信憑性も無い小学生でも分かる大嘘を真に受けてるんじゃないやねえよ……やっぱ、コイツ馬鹿だ。

大体、いくらS●RSの様な危険な病気の発生を国家ぐるみで隠してしまう様な隠蔽大好きな中国であつても、他国の奴がそんな大虐殺をしてしまったら一般にバレないはずはないし、大体が目撃者を潰そうが潰すまいが情報が漏れる事なんて無い。

世界的な常識として、鴉達の様な奴らは居ないとされている。

目撃者がいくら話したところで、マスコミであろうが近所の人達であろうが信じてくれるはずが無いのだ。

つまり、放っておくのが一番なのである。

『この馬鹿が！そんなガキでも分かる大嘘を真に受け

んな！』と、危うく叫びだしそうになるのをグツと堪え、鴉は真顔で言う。

「アンダーソンお前、俺のことそういう風に見ていたのか？」

ショックだ。と、鴉は仕草で示す。

「ク、クロウ……」

アンダーソンは目があつちに行ったりこつちに行ったりして、焦点が定まらなくなっている。

つい先刻の冷ややかな恐怖を覚えるアンダーソンは、消え失せていた。

「いや、しかし道神の話には信憑性が……」

何処がだ？と鴉は思ったが、勿論口に出したりはしない。

「アンダーソン、俺がそんな事をする奴かどうか？道神の話に信憑性があるとかどうとかじゃなく、お前なら本当は分ってるんじゃないのか？」

そう言って、鴉は『共に戦った同志だろ？いわば親友とも

「だろ？」と目で訴える。

無論、鴉はそんな事は微塵も思っていないかった。

だが、十二分に効果はあったらしい。アンダーソンはパツと見て分るほど、オロオロと動揺している。

既に、『Justice 正宗』の刃を鴉の首筋から放してフラフラと彷徨っていた。

「おーおー、面白いぐらい動揺してやがる。」

鴉としてはこのまま逃げてしまっても良い状況になっていたが、どうせなら焚き付けてやった方が良く思つて話しを続ける。

「そして紅流会だが、お前も知つてるよな？中国のチベット自治区東南部の例の事件」

「……」

「中国に住んでいたロツパ族約2300人が、全部殺された奴だよ」

アンダーソンの目の色が変わった。今気がついた。とても言うような顔をしている。

鴉は呆れて溜息を付く。

「そうなのだ、公式ではそんな事件は無かつたし、今でもチベット自治区東南部に住んでいるとされているロツパ族だが、実際は全員殺されている。紅龍会に。」

なんでも、年取つて大分イカれてきている紅龍会の大老師がやらせたらしい。

過去に恨みがあつたとかどうとか、同じ界限の連中なら殆どが知つていることだつた。

「アレ、紅龍会がやったんじゃないやなかつたっけ？」

鴉は真面目な顔を捨て、ニヤけ顔でそう言う。

もう真面目な顔をワザワザ作つたりはしない。アンダーソンの様子からすると、もう大丈夫そうだったからだ。後は、付け加える様に『道神達はこの美術館に盗みに入っている大悪党で、自分はそれを阻止しに来たのだ』と言うような大嘘を言う。半分は間違ひでは無いが、アンダーソンはしばらく顔を下げ震えていたが、不意に顔を上げる。

鴉は小さく身震いした。

アンダーソンの口元に、凄惨な笑みが湛えられていた。

からである。

「そうですか……そうです。N。どうやら、私はまたも謀られていた様でス！」

アンダーソンはそう叫び、美術館の二階の入り口付近で見ていた雑兵共の方を向く。

心なし、サングラスが光っている様だった。

*

鴉とアンダーソンの状況がどうも妙な雲行きを見せ

始めているのに、雑兵コンビである張チャンと白ベクも気がついて

いた。

だが、その状況が自分たちに悪い方向に進んでいるとまでは気がついていない。

「アレ？金髪の奴もう一息だったのに、剣を下ろしたぞ」

「何か、話してるぜ？何やってるんだ？」

そう言って、二人は、小首を傾げる。

「アレじゃないか？命乞いを聞いているんじゃないのか？」

「馬鹿言え、そんなら剣を下ろす理由が無いだろ」

「だよなあ」

そんな風に、のんびりと話している。

まるで、自分たちには全く関係の無い話しをしているようだった。

完全に観戦気分である。

「いや、きつとあのスーツの男があんまり情けないことを言うから呆れて下ろしちまったんだらうぜ」

「違っだろ、仮にも奴らはプロだぞ？命乞いで呆れたとしても剣を下ろしたりしないだろ」

そうやって、楽しく話している。

自分たちも一応プロであるはずなのだが、張チャンと白ベクは

そんな事はすっかり忘れていた。

「おい、お前はどう思う？」

と、もう一人の雑兵仲間に尋ねたとき、初めて異常に気がついた。

もう一人の仲間が、窓の外、遙か遠くの方へ脱兎のごとく逃げていっていたのである。

「え？」

二人が綺麗にハモって咳くのと、自分の体が誰かの影と重なっているのに気がついたのは同時だった。

嫌な予感が出て、恐る恐る顔を上げる。

其処には、サングラス越しでも分るほど、鬼のような形相をしたアンダーソンが立っていた。

二人は、まるで彫刻になったかのように固まった。

「君たち！我々は、ココに盗みをしに入ったのかね？」
単刀直入な、アンダーソンである。

急に日本語の滑舌が良くなり、英語を交ぜなくなったアンダーソンに二人は戸惑う。

コイツ……さつきまで妙な言葉を喋ってなかったっけ？

二人が、同時に考えた思考である。

「どうなのか！答えんかッ！」

まともに日本語を話す様になったアンダーソンの怒号が飛ぶ。

実の所、アンダーソンはキレると日本語の滑舌がバツチリになる。むしろ古語に近くなる。

アンダーソンが日本語の滑舌が良くなり英語を喋らなくなる事、それすなわちアンダーソンが本気で怒っているという証拠でもあるのだ。

じゃあ、常にキレてるよ。と、鴉が思わず言ったアンダーソンの習性である。

アンダーソンを知ってる奴なら誰でも知っている事ではあるが、この場では鴉と本人以外の誰にもそんな事は分るはずもなかった。

勿論、^{チャン}張と^{ベク}白の二人もだ。

しかし、^{チャン}張より多少要領良く生きてきた^{ベク}白はあることに気がつくことが出来た。

これを正直に答えたなら殺される、と。

白はなんとかアンダーソンをこれ以上怒らせまいと、アンダーソンが気に入る様な答えを一瞬思考し、答えようとした。

しかし、その一瞬が命取りだったのである。

白より要領悪く生きてきており、多少馬鹿でもあつた張は素直に答えてしまったのだ。

一瞬思考した白より、思考も何もせず素直に答えてしまった張の方が明らかに口から発音されるのが早い。

「あ、あの……」

「は、はい。そうです」

白の言葉が、張の言葉によって遮られる。

その張の一言が、アンダーソンと鴉の戦闘によって荒らされまくった美術館の廊下に静かに響き渡った。

「こ、このバツ……！」

『バカ！』と言おうとした張の音が、雲をも切り裂く様なアンダーソンの怒声によってかき消された。

「活ッ————ッ三」

アンダーソンの怒号共に、一筋の閃光が走る。

二つの首が、宙を舞った。

哀れ白と張は、アンダーソンが神業と言える速度で放った居合いによって首を綺麗に跳ね飛ばされてしまったのである。

わずか一瞬で、断末魔を上げる暇すら無く。あつさり
と、白と張の人生は終わりを告げた。

「は、はい。そうです」と「こ、このバツ……！」が、
彼らの最後の言葉である。

*

アンダーソンを焼き付けるだけ焼き付けて、鴉は自分
だけ悠々と逃げていた。

美術館の林を突っ切りながら、鴉は呟く。

「まったく、本当に恐ろしい奴だった」

アンダーソンという化け物の恐ろしさを振り返る。

雑兵二人の首を跳ね飛ばした後、アンダーソンは美術
館の壁を『Justice 正宗』で粉碎しながら突き進んでい

ったのである。

道神！貴様、私を謀ったな！」

例のキレたら滑舌ばつちりの日本語を叫びながら、大量の返り血を浴びて日本刀を振り回す金髪グラサン草履の米国人の姿は、異様以外の何物でもなかった。

そのグラサンで隠れていても分かるぶつ飛んだ顔が、妙に恐ろしかったものである。

鴉は少し身震いする。

「あんな、変態と殺りあつてたかと思うと寒気がするぜ」

そう呟いて、鴉はタバコに火を付けた。

と、大地が揺れた。鴉の遙か後方、美術館の方で何か爆発の様なものが起こったのである。

もしかすると、道神とアンダーソンが戦っているのかもしれない。

「おいおい……素手と刀で何故に爆発が？」

大いに不思議だったが、気にしないことにする。

大体、俺との戦闘であれだけ時間をくつたのに、道神が目的の物を奪って逃走していかないわけがない。だから、この爆発は恐らくアンダーソンの暴走の結果だろう。いや、別にそんな事はどうだっていい。俺はもう逃走してらんだから。

鴉はそう思い。それ以上、美術館で何が起きているか考えるのを止めた。

美術館で爆発が起ころうが、アンダーソンと道神が戦つてようが、目的の品がまだ美術館にあるうが、鴉にはまったく関係の無いことだった。

今の鴉には、何が起ころうと美術館に戻る気などサラサラなかったのである。

日が昇るにはまだ少しばかり早い闇夜の中、鴉は美術館とは反対方向へ向けて駆けていったのであった。



昔。現在小学生のピチピチ元気な子供達には、自分の人生を通り越してもまだ追いつけないほど遠い昔。

最近。現在老衰し、明日には動かないタンパク質の固まりになってしまっても一向に不思議ではない。そんな十年や二十年程度は最近と豪語する動く化石達にとっては最近。

そんな時期の出来事である。

日本の、とある全く開発もされていない人里離れた山の奥での出来事であった。

その山奥には、小さなダム程度の大きさに相当する台地が存在する。

水源が無いので作物も出来ず、農村も出来無い。鉱物も取れないのでなんの価値も無い。バブル絶頂期であっても一円も値段が上がらない。

そんな、地主である老人にとっては無価値そのものの

土地であった。

ある時、なんとかしてこの層の様な場所を諭吉さんに変えられないものかと思っていた老人に、願ってもない話しが舞い込んできた。

なんと、場所的に險しすぎてゴミの最終処理場にすら出来ないこの土地を、残らず買い取ってくれるという変人集団が現れたのである。

変人集団は何やら顔が怖かったり目がイツてたりして怪しかったが、無論、老人はその話に飛びついた。

相当安く買い叩かれたが、役に立たないのだけが取柄の土地だ。

老人にとって、何も無い所からお金が沸き出してきた様なものである。しかも、安くても売った土地はかなりの広大さであった。

残り少ない余生を楽しく過ごすには、有り余るほどのお金が転がり込んできたのである。

老人は喜々として土地を売り渡し、孫に囲まれて楽しく余生を過ごし、息子達が遺産争いを起こして憎しみ合

う程の遺産を残して幸せにこの世を去りましたとき。

メデタシ、メデタシ。

と、話は戻って現代。

そんな運の良い老人の話と関係が無くもない出来事が、鴉達が美術館で戦ったりしている間に起こっていた。日本上空を、黒い迷彩を施された航空機が飛んでいる。30人〜40人は優に乗れると思われる大きさの飛行機だった。

その飛行機が、ゆつくりと旋回しながら例の老人の土地だった場所に落ちてくる。船体が復帰する気配は無い。

日本の山奥であわや墜落事故か！と思われた。

しかし、その飛行機は機体を殆ど軋ませず普通に、むしろ見事に着地した。

飛行機が見事に着地してのけた場所、そこは老人が所有していた頃ならば只のススキ畑であったはずである。

が、現在は滑走路が引いてあり、着陸誘導設備があり、着陸帯があり、誘導路、管制塔などがある。

つまり、完全に空港と化していた。変人集団がやった

のである。

一体、どれほどの金をかけたのであろうか？そもそも、大して問題は無いとしても、国はこんな場所に空港を作る許可を出したのであろうか？

答えは、NOであらう。とんでもない変人集団だ。

無論、彼らも馬鹿ではないので自分たちだけで勝手に作ったりしたりしない。しつかりと、日本の関係各所のお偉方には話しを通している。諭吉さんで。

日本では、大量の諭吉さんを通せば大抵の事には知らん顔をしていくるのである。

他の国であつても、諭吉さんをエリザベス女王に変えたりベンジャミン・フランクリン(米100\$紙幣の肖像)に変えたりすればいいのである。

世界の常識だ。

そんな常識を上手く使い、一般には知られずに作られた空港が、ココである。

その空港に降り立った飛行機から、男達がゾロゾロと出てきた。

常人とは明らかに異にした、雰囲気だけで自らが危険だと伝えてくる男達であった。

「SYAHHA、やあーと付いたぜ！長くて窮屈な空の旅だった！」

先頭で降りて来た男が、その白に近い銀髪のをガリガリ搔きむしりながら言う。

雰囲気で危険さを伝えてくる男達の中において、さらに危険だと判断せざるを得ない風貌をした男だ。

ナイロンの様に堅そうなボサボサの白に近い銀髪、身長は抜きんでて高く、筋肉質な体によく似合う太い腕、色黒、捕食種を思わせる顔、上半身裸、白くてダブダブな作業服の様なズボンを足首に紐で止めて足が絡まらないようにしている。相当混ざっている様で、人種もよく分からない。

何より、瞳孔が開く直前の様な白目を剥いたイッた目に、左の頬から左腕の先にまで渡る鮫のタトウを彫っていた。

町を歩いていたら、半径5M以内には絶対に近づきた

くない男である。

「ほう……機内では全て寝ていた様だが……それでも長く感じるものなのか？」

と、その銀髪の男の後ろ隣に居た男が軽口を言う。

手には黒の皮手袋、上下黒地の迷彩服を着、靴先まで届く漆黒のレザーコートを羽織っている。夜であるのに、普通の人では前が見えなくなるほど黒く塗り潰されたサングラスを掛けていた。まさに、漆黒の男であった。

頭に髪は無い。が、明らかに剃った物とは違う。

頭全体に、火傷の後があった。

「あああ？何か言ったか？」

「……」

銀髪の男が首だけで振り返り、漆黒の男を白目を剥いた目でにらみ付ける。

が、漆黒の男は我関せずという具合で、銀髪の男を見ようともしない。

「……眩しいな」

サングラスをし、しかも夜にも関わらず、漆黒の男は

眩しそうに眉間に皺をよせて片手でサングラスの前を覆う。

この男にとっては、夜に遠くで照明が付いているだけでも眩しいと感じられるのだ。

銀髪の男の事は、明らかに無視されていた。

「ケツ、嫌なら割り貫いちまえよ！」

盛大に唾と毒舌を吐き、銀髪の男は漆黒の男をしばらくにらみ付ける。『いつかぶつ殺してやる』という感情がありありと伝わってきた。

「……」

漆黒の男は黙って肩を竦める。

気分を害した銀髪の男は、漆黒の男よりさらに後ろの男に声を掛けた。

この男二人は、風体や態度から察するに後ろの男共より上の人間である。そして、この銀髪の男は明らかに良い上司とは言えない。

そんな上司が気分を害したときに部下にすること、それは当然八つ当たりを込めた嫌がらせである。

「おい、長旅で女が欲しくなった。今すぐ調達してこい」

ちよつとした事、とでも言うように銀髪の男は言った。言われた部下の方はたまった物では無い。

ここは人里から遠く離れた山奥だ。風俗系の店など当然存在するはずも無いし、その辺で適当に捕まえてくる事も出来ない。何せ、ここに居るのは組織の人間のみ、つまりむさ苦しい男達ばかりだ。

「どうした？ さっさと行け！」

部下の男が戸惑っていると、銀髪の男は怒鳴った。

嫌がらせもあるが、半分は本気で言っているようでもある。この男、オツムは大丈夫なのであろうか？

部下の男もそう思ったようだったが、勿論口には出さない。

つとめて、丁寧言う。

「申し訳ありません、ここは人里離れた山奥です。女など居ません」

「……」

銀髪の男が黙ったので、伝わったのかと思えば男はホッとする。

その時だった。

部下の男の頭に、銀髪の男の手が乗せられたのである。

「え……？」

ゴキッ、という生々しい音と共に部下の男の首が百八十度回転し、地面に倒れ伏した。

銀髪の男が、部下の男の首をねじ曲げたのである。

「ゴミが、口答えしてんじゃねえよ。無能なら消えちまえ」

そう言って、銀髪の男は狡猾に笑う。

どうも、始めから殺す目的だったらしい。銀髪の男は、たった今絶命した自分の部下を眺めながら気分良く笑い出した。

その光景に、漆黒の男は眉を潜める。

「シャーク……いくらお前でも、こじや女が手に入らない事ぐらい分かってるだろ？」

さりげなく馬鹿にしていたのだが、部下を殺して気分

が良くなっていた銀髪の男。シャークは気付かずに笑いながら言う。

「SYAHAAA！分かってるぜえそんな事、当たり前だろ。ちよつとしたギャグだ！」

そう言って、なおも楽しそうに笑っている。

漆黒の男はさらに眉を潜めた。

『お前はちよつとしたギャグで部下を殺すのか？』とでも言いたげだった。

それが分かったのか分からなかったのか、シャークは笑いを噛みしめながら言う。

「そんな顔すんなよ。別にいいだろ、アウル？ちよつとゴミ掃除しただけだろうが！」

そう叫び、耐えきれなくなったのかまたもシャークは笑い出す。

「SYAHA-SYAHAA!SYAHAAAAA!!!」

「……」

アウル（フクロウ）と言われた男は、またも黙って肩を竦める。それほど気にした様子でも無いようであった。

恐ろしいことに、実はいつもの事なのである。

事実、仲間の一人が死んだと言うのに、後ろにいた部下共は『またか……』と言わんばかりの顔をしていた。

自分に被害が及ぶまでは、他人事なのである。完全に麻痺していた。

部下を殺してすっかり上機嫌になったシャークは、周りを見回して笑いながら言う。

「しっかし、日本つて所は何にもないな！ 周り山しかないぞ！」

そりゃあ、山間部に降りてくれば当たり前であろう。

アウルが、軽く溜息を吐いた。

「だから、この場所を何処だと思ってる？ よもや、首都空港などとは思ってはいまいな？」

アウルが、またはもシャークに軽口を叩く。

「っせーな！ ギャグツつてんだろうが！」

二度も出鼻をくじかれて、シャークはまたも激怒する。

「……」

だが、やはりアウルは我関せずである。おかげで、ま

たも部下が死ぬことになった。

二人目の部下の首を捻り、シャークは溜息を付く。

「もう飽きた。俺はもつと暴れてえんだ。おい？ 今度の依頼内容は何なんだよ？」

と、アウルに尋ねる。

アウルは露骨に『そんな事も知らなかったのか？』という顔をしたが、黙って依頼内容の書かれた紙を渡した。通常、すぐに焼き捨てるのが普通なのだが、今回相方がコレだ。こんな事も考えて取っておいたのである。

「あゝ？ こりゃあ、あんまり暴れられそうにねえな」

紙を眺めながら、シャークはそう呟く。だが、あまり残念そうには見えない。

「でも、本当にこんなチョロいのなら crown (名を冠する者) の俺らが出張るはずねえもんな。どうせ訳ありだろ、つまり、暴れる可能性が高いつて事だな？」

そう言つて、シャークはニヤリと笑つた。

必要な事だけには頭が働く奴だと思いつながらも、アウルは頷く。

もつとも、必要な事にも頭が働いていなければ幹部に
など成れるはずもない。

「さーと、美術館ミュージウムは山奥じゃねえんだろ？足は有る
んだらうな？」

そうシャークが言うと共に、上空から大人数を乗せる
大型のヘリが降りてきた。随分とタイミングが良いこと
である。

物凄い風圧だが、一団は誰一人としてビクともしない。

「アレが足の様だな……」

アウルその言葉に、シャークは顰めっ面で答える。

「また、空の旅かよ」

そう言いながらも、シャークは一番にそのヘリに乗り
込んだ。アウルや部下連中も後に続いて乗り込む。

そうして、都心に向かってヘリは飛び立った。道中の
時間、シャークが全て寝て過ごしたのはもはや言うまで
もないだろう。

ちなみに、彼らが所属している組織。それはヘリにデ

カデカと書かれているマークと同じ、地球を意味する言
葉。

『Earth』と言っ。

*

「えー、地球ってーのは、アルファベットの綴りで書
くと『Earth』って書へ」

駅前の大通りに面した場所にデカデカと立っている
ような大きな予備校で、受験の真っ最中である高校三年
生に信じられない程の低レベルな授業が行われていた。
「分かっていると思うが、E・A・R・T・Hって書く
からな」

小学生に教えているのかと錯覚してしまう様な教え
方である。綴りから教えている。

そんな馬鹿な授業を繰り返していたのは、鴉だった。
「あー、もう分かったな、じゃあ次はと……」

鴉は教卓に乗せてある英和辞典を適当にパラパラと

めくる。

「おし、じゃあ次はコレにしよ。フクロウつてのは『owl』
つて書くんだ。アウルつて読むからな」

そう言つて、ホワイトボードに『owl』と書いてみせ
た。無茶苦茶である。

信じられないことに、鴉の授業は毎回こんな感じだっ
た。

鴉が適当に英和辞書をめくり、出てきたページの適当
な単語を適当に解説する。という受験には99%以上役
に立たない授業をやっていた。

流石に鴉も始めの方は普通に授業をしようとしたが、
まったく上手くいかないので開き直った結果である。

無論、そのような投げやりな授業など誰も聞いていな
い。

他の先生方に訴えても何も改善しない(鴉が色々とし
てるから)と生徒達が知つてからは、予備校を辞めるか、
鴉の授業など聞かずに一心不乱に自分で勉強するかだ
あつた。

事実、今も寝てる生徒を覗けば皆一心不乱に教科書を
自分でやっている。鴉の声など完全に聞こえていないか
のようだ。

酷い環境に置かれてもやる気を無くさずに頑張る。真
面目な学生達であつた。

まあ、たまには隅の方で雀卓と雀、パイ持参で堂々と麻
雀を始める奴らもいたが、本当に希有な存在である。

悲壮なぐらいに真面目だな、コイツら。と鴉は思う。
「先生！」

生徒の一人が手を挙げる。後ろの方に座っていた生徒
であつた。

鴉は一端意味のない授業を止め、生徒の所に行く。

「何だ？」

「この、読みが分かりません」

その生徒が指し示す単語を、鴉は読む。

「コイツか、これは Neglect of duties (職務怠慢) つ
て読むんだ」

「分かりました。ありがとうございます」

その生徒は丁寧にお礼を言ったが、読ませた言葉は鴉に対しての痛烈な皮肉であつた。

たまーに、こういう事もある。

鴉にも勿論皮肉と言うことは分かつたが、ビクともしない。

自分が職務怠慢どころか、今すぐ辞めるべき最低な授業をしていることなど重々承知の事であつたからだ。

「先生！」

また、生徒が一人手を挙げた。

「何だ？」

ノートを差し出して来る。また、読みが分からない様であつた。

「resignation (辞職)」

生徒達の遠回しな様でいて、割とストレートな嫌がらせに眉一つ動かさずに答えながら鴉は一人思う。

おぜげが無いからなあ……金をくれるんなら今すぐ辞めたって良いんだけど……ピン札で2・300万位用意してくれば……言えば生徒全員のカンパでその位

集まるんじゃないか？

いつそ言つてしまおうか？と鴉は思う。

「タルイ……」

が、実際に実際鴉の口から出てきた言葉は、そんな言葉であつた。

*

そんなこんな授業後の帰路で、鴉は実に焦っていた。予備校に駄目元で頼んでみた給料の前借りがやっぱり駄目で、財布が大空に羽ばたいて飛んで行きそうな程軽かつたのである。

つまり、空っぽだ。

「あー、やつぱり逃げ帰らずにアンダーソンの後を追うべきだったな」

と、鴉は空に向かって呟く。

「何だかんだであそこ以上の収入が入る所なんてねえからな……」

そんな事を言いながら、鴉は喫茶『無道』に行くべきか行かざるべきか迷っていた。

美術館に突入した日からすでに二日が経過していたが、実は鴉は仲介人である沙羅に何の報告もしていない。無論、沙羅の事であるから既に鴉が失敗した事は分かっているだろう。

だからこそ、鴉は行きたくなかった。

鴉にも体面位はある。流石に今回ばかりは『失敗した。また仕事くれい！』と言うわけにはいかないのである。

しかも、あの沙羅の事だ。ノコノコと行ったら今度は何を言われるか分かったものではない。

また、何をされるかも分かったものではない。

「あー」

そんな風に悩みながら歩いていると、見慣れた後頭部が見えた。

茶髪でモサモサとむやみにポリウムがあり、まるでモップの見える髪がヒョコヒョコと動いている。

あの可哀想な特徴がある髪型は間違いない、平賀鉄朗。

通称テツ坊であった。

テツ坊は時々電柱で身を隠しながら、小ぶりだが中々の良いケツを持っている女の子を追っている様である。

若いなあ……と、鴉は思う。

誰が見ても、テツ坊がストーカー行為等規制法（正式名称をストーカー行為等の規制法に関する法律）に違反する行為をしているのは明白だった。パッと見て、ここまで怪しく見える絵ズラも珍しい。

溜息を吐きながら鴉は呟く。

「ストーキングするにしても、もうちよつと上手くやれよ……」

このままではそのうち捕まりそうだったので、鴉は声を掛けた。

「おい、テツ坊。そんな陳腐なやり方じゃ捕まるぞ」

「うっひやああ！」

電柱に隠れながら女の子を観察している所を背後から突然声を掛けられ、テツ坊は悲鳴を上げて跳び上がった。

て一目散に逃げだそうとする。

鴉はその首根っこを掴んで、電柱の脇に無理矢理しやがませた。

「何やってやがる。ここで大声上げてバレたら今までのお前の陳腐な努力が無に帰すぞ?」

「え、ア……鴉の旦那じゃないっすか! 驚かせな……ムグツ」

折角フオローしてやったのに無駄にしようとする馬鹿者の口を、鴉は押さえた。

「バカ、だから大声出したら駄目だろうが」

幸い、目標の女の子にはバレていない様である。

鴉が口を離してやると、テツ坊は不思議そうに尋ねた。

「な、何で大声出したら駄目なんですか?」

「は? いや、それはお前が捕まらない様にする為だが……何? お前捕まりましたかったのか?」

そう鴉が真顔で聞くと、テツ坊はさらに訳が分からないうという顔をする。

「え? なんで僕が捕まらなきゃならないんですか?」

大丈夫か? コイツ? と鴉は思ったが、律儀に答えてやる。

「そりゃあ、ストーキング行為がバレたら捕まるだろ?」

その鴉の言葉で、テツ坊はやつと状況が飲み込めたらしい。真っ赤になつて抗議した。

「ち、違いますよ! 僕はストーカーじゃありません!」
そのテツ坊言葉に驚愕したのは鴉だった。

「アレがストーキングじゃなくてなんだというんだ? ……ははあ、人気がない所まで行ったら押し倒す気だっ

たんだな、レイプは止めとけ。素人にはお勧め出来ん」

過去の、若かりし頃の映像が鴉の脳裏を過ぎった。

馬鹿な事をやったな、と過去の行為を少し反省する。

鴉も、昔は意味もなく若かったのである。

無論、レイプの言葉は鴉の冗談である。が、テツ坊は非常に焦った様だった。

「誰がレイプなんぞするか! か、彼女は良く行くコンビニの定員で、かわいいから気になつて、今はコンビ

二のバイトの帰りで、声を掛けようと思って、ちよ、ちよつと声を掛けるタイミングが無くて後をついて行ってただけです！」

その言葉に、鴉は顔を手で覆う。

つまり、テツ坊はコンビニで彼女がバイトが働いていた時から今まで、ずっと付けていたということになる。あの陳腐な尾行でバレていないのが奇跡に近い。

マジで言ってるのかコイツ、それがストーキングだというのに……。

「テツ坊、可哀想だが意識して無くても捕まるものは捕まるぞ。気をつけろ」

軽く首をふると、鴉にしては珍しく非常に優しい言葉でテツ坊を諭した。

テツ坊は耳まで顔を真っ赤にする。

「う、うるさいなあ！別に良いだろ！」

その言葉を聞きながら、コイツは駄目かもしれんなあ……、と勝手に人の将来を心配する。と、鴉は閃いた。

コイツは……儲け話になるかもしれん。

鴉はニヤリと笑いながら言う。

「じゃあテツ坊、俺がお前に話しかけるチャンスを作ってやるよ」

そう言うと、テツ坊はしばらく言葉の意味が分からずにボーっとしているが、突然真剣な顔になって言った。

「ま、マジですか？嘘じゃないでしょうね？」

「あ、ああ……」

急に声を張り上げたテツ坊に鴉の方が驚いたが、食いつきが良い方が鴉はやりやすい。

鴉は簡単に作戦をテツ坊に伝えた。

「つまり、俺がヤンキーっぽく絡むから彼女が困りだしたら、お前助けろ」

随分といい加減な作戦である。古典的にも良いところだ。テツ坊もそれは感じたらしい。ジト目で『大丈夫か？』

という視線を鴉に送ってくる。

「任せろ、確実に成功する」

不敵な顔で鴉はそう言うが、当然鴉には何も根拠など無かった。所詮、他人事である。

だが、他人であるテツ坊には十分効果的な顔だった。

「その代わり、成功したら今までのツケ、全部チャラな。ついでに金も貸せ」

自分で勝手に提案して肝心な所は相手任せの適当な作戦であるのに、鴉は堂々と恥ずかしげもなくそんな事を言つてのける。

誰もが眉を顰める相当横暴な要求であつた。が、

「分かりましたよ」

と、軽くテツ坊は答えた。

実は、テツ坊は年の割に中々稼いでいて、鴉とは比べものにならないほど財布には諭吉が唸っている。

若い頃は、必要以上に金があると金銭感覚が鈍くなるものである。

鴉もそれを見越して金になると踏んだのだ。

「じゃあ、行ってくる」

そう言つてテツ坊に向かつて軽く手を挙げ、鴉は女の子を追いかけた。

*

期待に胸を高鳴らせながら、テツ坊は鴉を見ていた。

テツ坊はまだ二十歳、若い。

やりたい盛りでもあるが、まだ女の子に幻想を抱いている奴も居る年頃だった。

テツ坊もまた、女の子にまだ幻想を抱いている若者であつた。

いつも行くコンビニで彼に笑顔を振りまいてくれるその子に、惚れてしまったのである。

笑顔は、勿論営業スマイルだ。そんな事は、彼にも分かっている。コンビニのマニユアルにしっかりと、『接客は笑顔で』と書かれているのだから知っている。

だが、テツ坊は若い。あらゆる意味で若い。

なにより、女性経験が皆無なのが駄目押しだった。

そんな童貞野郎が、もしかして俺に気が……？などと妄想を抱くのを押しとどめるには、その女の子のその笑顔は眩しすぎた。可憐すぎたのだ。

今、彼の脳内では近い未来起こるであろう出来事がシユミレートされている。

こんな感じだ。

「おうおう、ねえちゃんよ！」

などと、鴉が扮するチンピラが女の子に絡んでいる。

「や……こ、困ります」

女の子が、それに困っている。「困ります」などと言つて大変分かりやすく困っている。

そこに、颯爽と現れるのだ。テツ坊が。

「おい、お前何やつてるんだ。彼女、嫌がつてるじゃないか！」

そう言つて、女の子を庇うようにチンピラ（鴉）の前に立つ。

と、チンピラ（鴉）はそんなテツ坊の気迫に怯んで。

「チッ」

と言つて立ち去る。

「あ、ありがとうございます」

と、女の子は怖くて泣いていたのか、潤んだ瞳でテツ

坊に感謝を告げる。

テツ坊は軽く前髪を払つて。

「いいんですよ、当然の事をしたままでです。お嬢さん」

などと言ひ。感動している女の子と上手く仲良くなつ

て、あわよくばあわよくばあああああ！

というような妄想が、テツ坊の脳内で繰り広げられていた。

テツ坊が近未来の自分の姿（妄想）のあまりの格好良さに感動で打ち震えていると、鴉が女の子に追いついた。

何やら話しかけている。

「お、話しかけた」

テツ坊はそう呟いて、電柱の隅から顔をだして鴉と女の子を覗く。ただ、少し遠すぎて何を話しているかまでは分からなかった。

さあ、困れ、困れ、困れ困れこまれええ……！

そうテツ坊は念じているが、一行に女の子は困った様子を見せない。

いや、それどころか……。

「アレ？何か、楽しそうに話してないか？」

そうなのだ。女の子は困るところか、鴉と楽しそうに喋っている。笑顔だ。

アレ？アレ？アレアレあれえ……？

本当に不思議そうな顔で、テツ坊はその様子を眺めている。

鴉と女の子はひとしきり楽しそうに話すと、連れ立って歩き始めた。

何と、女の子の肩に鴉の手が回されている。

鴉はちよつと振り返って、『スマン』と手刀で謝って女の子と去っていった。

その場には、テツ坊だけが残された。

「え……？」

テツ坊は始め何が起こったのか分からずに呆然としていた。が、しばらくすると状況が飲み込めたのか、まるでお湯を注いで解凍しているかの様に段々と表情を取り戻していく。

そして。

「う、ウアあああああああああああ……」

と、雄叫びを上げるように泣き叫びながら、テツ坊は鴉達とは反対方向へ走って行った。

青春である。若者がまた一人現実を知り、大人の階段を上った瞬間であつた。

その泣き崩れた顔は、見た人が思わず通報するほどであつたという。

ちなみに、この事件はテツ坊にとってトラウマになつた事は言うまでもあるまい。

*

「忌々しい……」

窓も何も付いておらず、明かりが乏しい。

周りには全てコンクリート、しかも使い古されている様でその色合いはまるで監獄の様である。

そんな空気が濁っているような部屋で、部下に負傷し

た左手の包帯を換えさせながら道神タオシエンは憎々しげに呟いた。

その傷は、アンダーソンにやられた物である。

「土壇場で気付きおって……あと少しだったというものを！」

道神には珍しく、部下の前で感情をむき出しにして怒鳴る。残った手で、近くにあった机を叩き割った。

治療している部下はそんな道神の様子に不安そうな顔をしたが、ただ黙って包帯を換える。

こういう状態の時は黙っていた方が身の為だと、知っていたからだ。

道神は大きく舌打ちをして、傷を作った時を思い返す。道神が美術館での目標の品を探すのは、思ったより難航していた。

情報では既に展示されている筈だったのだが、情報が何処かで食い違いを起こしたのか展示スペースに目標の品が展示されていなかったのである。

仕方なく、展示前に保管しておく場所を見つけ、それから探すなど手間が掛かることを道神はしなければならなかった。

そんな風にモタついていた折り、突然アンダーソンが

壁をぶち破って『道神！貴様、謀ったな！』と言いなタオシエン

がらやって来たのである。

道神はもう一度欺けないかと試したが、もともと口下手な道神である。鴉の口先に完全に踊らされていたアンダーソンには全く効果がない。

応戦してアンダーソンに一撃くれてやる事は出来たものの、目的の品を持ち帰れなかった。

アンダーソンとの戦闘時に僅かに手を斬られて品を落とすし、しかも、その最悪とも言えるタイミングで騒ぎに気付いた警察共が駆けつけて来たからである。

本国以外で職種が違う奴らを殺したら公にならないわけが無いし、腹が立つほど無意味に真面目な奴らで、道神はすぐさま逃げるしかなかった。

「賄賂も受け取らんとはな……日本の警察とは優秀だ」

そう、道神は忌々しげに呷く。

無論、褒めているのではない。『賄賂を受け取る度胸

もない小心者ども』と言って馬鹿にしているのである。

実際、その通りの奴らであったのだろう。

今回、道神はとにかく運が悪かった。

誰も居ないと思っていた対抗勢力が何故かいて、しかもそれが鴉であり、期待していた弟子は時間稼ぎも出来ずに舜殺されてしまう程の役立たず。本国から増援も望めない。現地で調達した奴は馬鹿みたいに『正義』にこだわる奴で、もう少しの所で裏切り、しかも、すっかりと調査させた筈の情報には間違いがある。

踏んだり蹴ったりであった。

「それに、だ……仕事自体が納得できん」

そう言いながら、道神はこの仕事をやる経緯を思い出していた。

*

緊急の幹部集会だった。それも、特殊なだ。

無視したい気持ちに苛まれながらも、道神は大老師オサケンの寝室に向かう。

の寝室に向かう。

普通の幹部集会は幹部集會室でやるのだが、この集会は大老師の寝室で行われる。

「老碌したなら大人しくしておけば良いものを……」

紅龍会本拠地の、隙間無く紅絨毯が敷かれた廊下を歩きながら道神は溜息を吐いた。

昔は畏怖と尊敬しか抱いた事の無かった人物、大老師を、道神は軽蔑するようになっていた。

紅龍会の大老師は、半年ほど前から病に伏せている。

最近とみに悪くなり、もうまもなく死んでしまうだろうとも医者から言われている。

それは、別に軽蔑には値しない。人が死ぬのは当たり前だ。だが……。

「狂った」

そう、道神は吐き捨てる。

はつきりと、精神異常者の様に狂っているわけでない。だからこそ問題なのである。

はつきりと狂っているワケではないので、精神病院に押込むわけにもいかない。

また、仮にも大教師であるから無茶苦茶な命令でも拒むことも出来ないのである。

そして、する命令がまた酷い。

「無意味に、人を殺そうとする」

そうなのだ。大教師は命じられる側からすれば全く無意味な、というより大教師自信の心の平安の為にしか役に立たない事を命じる様になっていた。

酷い物では、チベット自治区東南部のロツパ族を全員虐殺させたことなどが上げられる。

「しかも、昔その縁の者に罵倒されただけではないか……」

罵倒の代償が、一族の滅びである。狂っているとしか

言えない。

しかも、約2300人の大虐殺である。本国での事であれば、確実に各種メディアにバレていただろう。

紅龍会創設の時から大教師の弟子として組織に居た道神は昔の、部下に慕われ、その強さに鬼神とも呼ばれていた老師を知っていた。だからこそ、余計に腹が立つ。

「昔は我が命を生涯この人の為に役立てようと思うほど素晴らしい人だったのだが、今はなんと醜い心である事か」

そう道神は小さく呟きながら、大教師の寝室の扉を開ける。

扉から出てきたのは、豪華な、全体が朱で彩られた部屋である。

幹部、つまり各老師達は全て揃っていた。大教師のベッドを囲むようにして立っている。

道神を含む全ての老師は、かなりの高齢であった。皆パツ見で老人と呼べる男達だ。

実際、この中で未だに現役なのは道神一人であった。

そんな爺共の中でも一目見ただけで死相が出ていると分かる顔をした老人、大老師に道神は中国流の作法で恭しく頭を下げる。

クオンエン
「道神、遅れながら馳せ参じました」

「うむ……ゲホッ、ゴホッ……では集会を始める」

そう老人がベッドの上で咳き込みながら言い。集会が始まった。と言つても、大老師である老人が発言するだけの集会である。

ひとしきり咳き込んでから、大老師は語り出した。それは、大老師の昔話である。

何と長くて意味のない事を……と思ひながらも、道神も老師達も黙つてきいている。

内容はこういうものである。

昔、十六世紀後半、大老師の先祖は中国皇帝の優秀な臣下であった。皇帝は大老師の先祖に感謝し、感謝の印として特注で作らせた小さな箱時計を送った。

やがて一族は没落したが、その時計は大老師の世代ま

で受け継がれていたのである。

それは、一族にとって榮譽の証だった。

が、第二次世界大戦の折、貧困にあぐねその時計を売り払つてしまったのである。

「アレは……ゴホッ、我が一族の血の榮譽の証だ。私……

……ゴホッゴホッ、自分を証明する誇るべき証が欲しい。取り返して、来て欲しいのだ……ガハッ、ゴホッゴホッ！最後の頼みだ」

大きく咳き込みながら、大老師は言う。

道神を含む老師達は、その言葉を聞いて全員が固まつてしまつていた。顔に、ハッキリと怒りを貼り付けてる者もいる。

昔、この紅龍会がまだ出来て間もない頃、皆の前で大老師は言ったのだ。

『俺には自分を証明する物など何も要らない。お前らこそ、この紅龍会こそ、俺の榮譽の証。俺その者を証明する誇るべき証そのものだ』と。

誇らしげに言つたその言葉に感動し、信じて、道神を

含む老師達はこれまで付いて来た。

が、今の大老師の言葉は、それを完全に裏切る物だったである。

あまりのショックに、呻くように道神が声を上げた。

「榮譽の証とは……我々では無いのですか？自らの誇るべき証とは……あなたが作り上げたこの組織ではないのですか？」

その道神の言葉を皮切りに、他の老師達の間からも数々の批判の声上がる。

「そうです！何を言っているのですか！」「あの時の言葉は……」「どうか、正気に」「我々を欺いていたと！」

「私は悲しい」

など様々な声上がる。が、

「馬鹿者共が！五月蠅いぞ！そういう問題では無いのだ！過去の感傷など何の、…ゴホッゴホッ…意味も無いわ！大人しく言うとおりにしろ、これは私の『最後の言葉』だぞ……ゴホッ、ゴホッゴホッ！」

と、自分の部下である老師達の悲痛な叫びにただ怒り

で返し、そのまま咳き込みだした。

大老師を真に慕っていたからこそ出た感情を単なる『過去の感傷』程度にまとめられ、道神含む部下達は哑然として声も上げられなかった。

そうして、その場は切り上げられ、後で老師だけで集会を行った。

議論は無論、大老師の『最後の言葉』を聞くかどうかである。

掟では『最後の言葉』は絶対であり、しかも大老師の言葉であった。

しかし、全ての老師が今回の事で大老師を見放していたし、その箱時計は今日本の美術館関係が所有していて、金だけでなんとか出来る物では無かったので議論は白熱した。

結果として、大老師の言うことを聞くことになった。理由としては『どうせ、もう死ぬのだから。本当に最後であろうし聞いてやろう』という結論である。

もう一人として、大老師の存命を望む者は其処にはい

なかつた。

*

「老師」

「……何だ？」

過去に埋没していた道神ミチカミは、部下の呼びかけに対して少し遅れて返事する。

包帯を換えていた部下は、少し前に下がっていた。

「どうぞ」

そう言つて、部下は書類を渡してくる。再度調べる様指示していた美術館の情報だ。今度こそ、正確な物であろう。

受け取りながら、道神はその部下を見て考える。

私は、弟子に慕われている師であるのだろうか？ 実際

は、大老師と大差無いのでは無いか？

「何か？」

道神に見つめられて不思議に思つたのだろう。部下は怪訝そうな顔で道神に尋ねる。

道神は軽く首を振つた。

「いや、何でもない。……今度は、間違い無いのだろうか？」

一応、道神は念を押しておく。

「はい、確認しました。正確な情報です」

「そうか……」

「それと、決行日三日後が最善だと思われます」

その部下の言葉に三日後まで大老師は生きているのだろうか？と、道神は思う。

大老師は、今この瞬間に死んでも全く不思議では無いという情報が、本国からは来ていた。

もし、持ち帰る前に大老師が死んでしまえば、道神の苦勞は報われない所では無い。いや、今回失つた全ての部下が無駄死にである。

あの毫碌し、狂つた爺の為に道化を演じたくはない……いや、始めから道化だとしても、成果ぐらひは上げな

ければ形も付かない。

「分かった。下がっていい」

溜息を付くのをグツと堪えて、部下を下がらせる。

「とにかく三日後だ。三日後になってみなければ何も分からん」

そう言つて、今度こそ道神は溜息を付いた。

*

「憂鬱だ」

繁華街の寂れた一体の喫茶店、つまり喫茶『無道』に向かいながら鴉はそう呻いた。

何故、鴉が行くのを躊躇っていた喫茶『無道』に急に行く気になったのか？

それは昨日の午後11時まで遡る必要があった。

*

テツ坊との一件の女が眠りに付いているベッドの横で、鴉はタバコを吹かしている。

鴉はホテルにいた。まあ、そういうホテルだ。古い言い方をすれば連れ込み宿とも言う。

個人情報を守られる所。お金を求める少女達や、その少女達を求めるおじさん達が暗躍する場所でもある。

そんなホテルの一室で、鴉は非常に後悔していた。

「金銭問題を一気に解決する作戦が……」

そう、溜息と共に漏らす。

テツ坊の期待と純情を見事に砕いてしまった鴉だが、テツ坊に申し入れた時からそういうつもりだったわけでは無い。鴉は女に困る様な男では無いし、それに別に彼女などおらずとも玄人の女で十分満足する男だ。むしろ、玄人の方を好む。

だが、金には殆ど常に困っている。浪費癖があるからである。

それ故、わざわざ儲けるチャンスを潰して女を取る様な男では決していない。だが、結果としてそうなってしまう

った。

それには理由がある。

テツ坊の話しで純情そうだと踏んでいた鴉は、チンピラのナンパ風に声を掛けたのである。

だが、向こうは嫌がるどころか、むしろ引くほど鴉より積極的だった。

そんな相手を突き放す事は、鴉も男であったのでちよつと無理であったのだ。実は、軽くフェミニストなのである。

「そりやあ、なあ……あんな風にあからさまに誘われたんじや、断れねえよ」

立ち話をした時に相手に言われた誘いの言葉を思い出し、鴉は首を振る。

「口にも出せん……」

テツ坊が青年故の青い妄想を抱いていた相手は、顔が良ければ誰でもいい尻軽のアバズレだった。つまり、テツ坊の容姿は彼女には箸にも棒にもかからないということであろう。

「運が悪いい……」

結局やることはやってしまったている癖に、自分は運が悪いと鴉は嘆く。

そんな時だった。

突然、ベッド脇にある電話が鳴ったのだ。

こんな時間に……フロントから電話？

何やら嫌な予感がしたが、鴉は女が起きる前にそれを取る。

「あー、もしもし」

「お楽しみの様ね、鴉」

鴉は驚愕した。

フロントでは無かった。その聞き慣れた声は……。

「沙羅……お前、どうやってこの場所が分かった？」

鴉の背筋に、冷たい物が走る。電話してきた相手は、無道沙羅であった。

ココはラブホテルだぞ？場所が分かったとしても、直接電話なんか出来るのか？

「蛇の道は蛇っていうでしょ？簡単だわ」

そう事もなげに言つて、沙羅は受話器の向こうで嘲笑する。

そういう問題か？恐ろしい小娘だ。

鴉は無道沙羅という人間の恐ろしさを再確認した。只者ではない。

きつと、沙羅には全ての情報が筒抜けなのであろう。

「で、何の様な？」

何やら薄ら寒い物を鴉は全身に感じたが、色々面倒になつてその辺りは無視して尋ねる。

と、低い怒声が返つてきた。

「何の様？へえ……何の様？ご挨拶ね、何の様と来るのね……ふくん。仕事を放棄しておいてその態度、偉くなつたわね」

その声色だけで、鴉は自分が殺されるのではないかと危惧した。

背後をチラリと確認しながら言う。

「スマン、失言だった。あと、連絡を全くしなかつたのも謝罪する」

「謝罪？ハッ、謝罪の言葉でどうにかなるとでも思っているの？中々面白いジョークね、傑作だわ」

そう言つて、クツクツと受話器の向こうで笑っている。

ヤバイ……コレは本当にヤバイ。

鴉は真剣に自分の身を案じた。入り口のドアの向こうの気配も察知しようと警戒する。

既に、刺客が送られているかもしれない。

「まあ、その辺の話は店ではあげるとにかく、明日店に来なさい」

沙羅はそう言い残し、唐突に電話を切つた。

ブーツ、ブーツ、という電話の音が、ホテルの部屋に不気味に鳴り響いていた。

*

というような出来事があったのだ。

喫茶『無道』に行けば、沙羅に何をされるか分かつたものでは無い。だが、

「逃げて、所在がバレるなら無意味だ……」

そうなのだ。例え鴉が逃げたとしても、ラブホテルに居ることまで調べてしまう様な搜索スキルを持つている沙羅相手にしても無意味なのである。

沙羅の怒りに油を注ぐだけだ。

それならば今沙羅の所に行き、何とか活路を見出す方が得策であろうと鴉は考えたのだ。

「だが、憂鬱だ……」

もう一度、鴉はそう呟く。

確かにコレしか方法は無かった……だが、すでに俺は袋小路に入っているとも考えられる。

そんな事を考えていると、すでに鴉は喫茶『無道』に付いていた。

「仕方が無いか」

割り切って、鴉は入り口を開ける。虎穴に入らずんば虎児を得ずという奴であろう。

例のカーラントというレトロな音と共に、レトロな店内が姿を現した。つまり、古い。

「……」

いつもなら、鴉と気付く前にとろける様な笑顔と「いらっしやい」という愛想の良い声があるのだが、完全に無言で沙羅は鴉を迎えた。

無視してグラスを磨いている。

戦場の様に緊迫した空気が、『無道』の店内を包んでいた。

「よう」

「……」

鴉は果敢にも明るく挨拶をしたが、沙羅は無言で一瞥するだけである。

「おーい、客だぞ、スマイルだろ？スマイル？」

緊迫したムードは鴉にも分かっていたが、軽口を叩く。開き直っていたのだ。

だが、反応は無かった。

その様子を見て、大きく溜息を付きながら鴉はカウンターに座る。

「……話とは？」

と聞くと、唐突に沙羅がTVを付けた。映し出されたNKH（日本協会放送）のキャスターが、こんな事を言っている。

『先日オープンした美術館二階で、ガス爆発がありました。怪我人は居ませんでした。展示品の被害は甚大で、二階の廊下に展示されていた美術品の殆どが壊れてしまった様です。また、建物自体への被害も甚大で、一階まで突き抜ける大穴や、多くの壁が崩れてしまった模様です。他にも、第三保管庫に保管されていた美術品が床に落ちるなどしていました。警察はガス爆発の原因を欠陥工事の為として……』

と、其処で沙羅はTVの電源を切った。

「……またガス爆発で欠陥工事なんだな、捻りを加えろよ。大体、美術館って火気厳禁じゃなかったか？」

鴉はそう、憎まれ口を叩く。

沙羅はそれには答えず、無言で今まで拭いていたグラスを置いた。

「さて、覚悟は出来てるんでしょうね？」

「……」

鴉は聞こえないふりをしたが、無論効果は無い。

「依頼を無断で放棄してトンズラこいた、その報いを受けるか・く・ご・はー！」

言葉の最後の方は、腹の底から込み上げてくる様な怒気をはらんでいる。沙羅の手を乗せたままのグラスに、ピシリとヒビが入った。

顔の前に火を突きつけられている様な重圧を感じ

プレッシャー

たが、表面ではヘラヘラと笑って鴉は手を挙げる。怯えたら負けなのだ

「何？」

「言い訳いいか？」

その鴉の問いに、沙羅は天使のようなとろける笑顔を

鴉に向けて、軽く小首を傾げる。

気味が悪いほど優しく言われた。

「私がそれを許すと思うの？」

「……」

取り付くしまも無い。

鴉は深く溜息を付き、タバコを懐から取り出して吸う。だが、味は分からない。

虚勢を張っているのだ。

「吸うか？」

鴉は沙羅に勧める。沙羅は未成年だが、鴉にはどうでもいい事である。

鴉は、機嫌を取っているつもりであった。

沙羅の様な守銭奴な小娘は、いかにも吸いそうであるというのが鴉の見解なのである。

「馬鹿ね」

しかし、鴉の言葉は沙羅の一笑に伏されてしまった。露骨に人を見下した目を向けてくる。

「きつと脳みそが煙で出来ているのね。そんな金が掛かるばかりで、何の特も無いような物を吸っているなんて」

「……確かに、金は掛かるがな」

「それに、体にも悪いわ」

金が掛かるより体に悪いのがついでの様に沙羅は言ってくる。

しかし、そんな事より鴉は沙羅のその言葉にショックを受けた。

「何言ってるやがる？コイツは体にいいんだぞ？」

本気で鴉は言っている。鴉の理論では、タバコは吸えば吸うほど体に良く、肺ガンになる奴は気合いが足りないだけなのだ。

何処かの誰かと似たような理論である。根拠は勿論無い。

沙羅は呆れを通り越して感心していた。

「凄いわ……貴方の脳みそ、本当に煙で出来ているのね」

そう言っ、目線だけで『こんな馬鹿がいては世も末ね』と語ってくる。

鴉は軽く肩を竦め、呆れた。

所詮コイツも小娘だな、何も分かつちやいない。と言わんばかりである。

「まあ、いい。俺に何させる気だ？」

「解体して臓器売りさばくわ」

間髪入れず、さも当然という顔で沙羅は言つてのけた。

鴉は顔を引き攣らせる。

「お前……」

「……と言いたいところだけど、あんたはそれより使った方が金になるわね」

残念そうにそう言つて、沙羅は一枚の紙を鴉に寄越す。

「……コイツは？」

鴉は、渡された紙を持ち上げながら怪訝そうに尋ねた。

その紙が、例の美術館の見取り図であつたからだ。

「今更いらんだろ？」

「あんたは運が良かったのよ」

その言葉と共に、沙羅は見取り図に記された美術館の

二階の第三保管庫を指さす。

「ここに例の依頼の品がまだあるわ、決行日は二日後の夜ね」

一口で説明した沙羅の言葉に、思わず鴉は吸っていたタバコを口から落としてしまった。沙羅が眉を顰める。

「ちよつと、灰皿にすてなさいよ。カウンターに後が付くでしょ？」

「道神はしくじつたのか？」

沙羅の叱責は無視して鴉は言う。

鴉は驚愕していた。信じられないという顔をする。

道神という老人と鴉は古くからの知り合いである。勿論、昔から商売敵であり犬猿の仲であつたのだが、それだけに腕の良さも知っている。

鴉には、何の邪魔もなく道神が失敗するなど考えられなかつた。

そんな事は知らない沙羅は、涼しい顔で言う。

「どうも、しくじつたみたいよ。邪魔が入つたらしいわ」

その言葉に、鴉は閃いた。脳裏に、キラリと歯を光らせる金髪の白人の映像が浮かぶ。

「アンダーソン、あいつ間に合ったのか……」

そんな呟きを、口から漏らす。

あのタイミングで間に合うとは、道神もノロノロやっていたものである。

「何だ。俺も役に立ってるじゃねえか」

唐突に、鴉が言った。

「は？何言ってるの？」

「いや、俺がアイツを焼き付けたから二回目があるわけ……」

鴉は主張するが、沙羅は怪訝そうな顔をする。

鴉には分かっている事だが、沙羅には鴉が何を言っているのか全く分からないだろう。

ついには、『駄目になったか』という様な哀れそうな顔をしてくる。

説明してやりたい鴉だったが、沙羅が理解するまで説明するのは骨が折れそうであった。

「いや、気にするな。つまり、この間までの仕事を完了すれば良いわけだな」

面倒であったので、沙羅の無言の嘲笑は無視して鴉は話を進める。

この間の仕事を続行するだけなら、多少面倒であるが鴉には許容範囲と言えた。

沙羅なら、本当に臓器を売りさばきかねんからな……。

だが、それだけで終わるほど無道沙羅という女は甘くはなかった。

「一割ね」

「は？」

意味が分からず、鴉が問いかける。間髪入れずに答えが返ってきた。

「あなたの取り分」

「……はあ」

鴉は絶句した。

「一割？9.1って事か！」

「そうよ」

あつけらかんと「当然でしょ？」と沙羅は言う。

「一割って……無いだろ、著作料じゃないんだぞ？」

嘩然としながら鴉が言うと、沙羅はにっこり例の天使の笑みをみせて。

「黙れ」

と言った。どうも、今日は笑顔の大盤振る舞いの様である。用途が最悪ではあるが。

「……」

鴉は反論出来なかった。沙羅の顔に『じゃあ、バラすぞ?』という意志がデカデカと浮かんでいたからである。

まあ、死ぬよりマシか。

鴉はそう自分を納得させた。

沙羅はそれで満足したようで、侮蔑の顔を納めて帳簿を付け始めた。恐ろしいほどの桁の金額が並んでいる。そのくせ、鴉にこう聞く。

「客なんでしょ、何か頼まないの?」

無道沙羅という女は、強欲極まりない女であった。

呆れながらも、鴉は答える。

「コーヒー、セルフサービスじゃ無い奴で」

インスタントであつても、せめて作つてから出して欲

しいという意味で鴉は言う。

「はい」

が、トンツという軽い音と共に出てきたのは……缶コ

ーヒーであつた。

しかも、ぬるい。

「ジョー…… (缶コーヒーメーカー)」

ここまで期待を裏切ってくれると、もう凄いとしか言
いようが無い。

プルタブを開け、黙って飲む。ぬるい缶コーヒーの味
がした。

「そうそう、言い忘れてた。あんただけだとトンズラ
するし、今回は組んで貰うから」

突然、思い出したように沙羅が言う。

「組む?俺が?」

沙羅がそんな真つ当な仲介人みたいな事を言ったの
に、鴉は驚いた。

普通、こういう仕事は単独でやるのは難しい。難しい
依頼であれば、腕がよくても大抵の仲介人は組ませるも

のである。

だが、守銭奴の沙羅は自分の取り分を多くするため、今まで鴉と誰かを組ませた事は無い。

今回は相手に道神ダクセンもいるだけに誰かと組むのは鴉にとつても好ましかった。

が、薄気味悪い物を感じる。

「守銭奴のお前が、大盤振る舞いだな……」

そんな鴉の疑問に、沙羅はニヤリと笑う。

「使い勝手の良い馬鹿を見つけたのよ。そいつへの依

頼料はね……なんと無料よ」

「は？」

鴉は自分が聞いた言葉が信じられなかった。ほぼ例外なく命を掛けることになるこの仕事を、無料でやるなんて鴉には考えられない。

タダ？ あは馬鹿どころか痴呆だぞそいつ……何考えて生きてるんだ？

「腕は良いんだけどね。一人でやらせるには……ちよつと、だからアンタも付けたのよ」

そう沙羅は続ける。

沙羅の事だ、本当はそいつ一人に仕事をさせて儲けを丸々取りたかったはずであろう。

「なるほど、それで二日ほど放置されてたのか俺は……そいつは誰なんだ？」

沙羅は、意地の悪い笑みを見せた。

「あんたの知り合いよ、そろそろ来るわ」

「俺の……知り合い？」

嫌な予感がする。

と、唐突に普段客など来ない喫茶『無道』の入り口のドアが開いた。例の、レトロなカランツという音が響き渡る。

「WOW！ コレは随分と奥ゆかしい shop デス、ワタクシ感動です！」

太陽の逆光で見えなくても、その声とシルエツトで誰か分かった。

この言葉、いや、それ以前にこんなシルエットを作れる奴はヤツしかない……。

【正義・アンダーソン！】

「OH！クロウ！」

「またもやハモってしまふ。」

そう、其処には、金髪でグラサンでスカジャンで柳生でGパンで草履でベルトに日本の刀を差した白人の男、つまりアンダーソンが立っていた。

「クロウ……無事でしたKa-」

アンダーソンは鴉を認めると、そう叫んで抱擁ハグしてくる。同時に良い打撃音がして、アンダーソンの体が床に転がった。

鴉が、間髪入れずにアンダーソンを殴り飛ばしたのである。

「HAHAHA……相変わらずデスNe、鴉！」

だが、アンダーソンには全くダメージが無いようで、

まるでちよつと躓いて転んだだけかのように軽く立ち上がった。

チツ、このバカ、道神タオシエンに殺されていなかったのか……

……

鴉が侮蔑を込めて言う。

「俺に抱きついてくる男は殺し合いの相手だって、昔言わなかったか？」

「Fum、そう言えばそうだった様な気がします。」

Sorry……

服を軽く叩きつつ、軽やかな笑顔を見せてアンダーソンはキラリと齒を光らせた。

その姿を見て、鴉は深く溜息を付いた。

戦闘時でもアンダーソンの脳みそは飛んでいるが、実は普段はもつと飛んでいる。

仕事の時以外はコイツの相手はしたくないので、鴉は

「HAHAHA」と笑うアンダーソンを無視して沙羅の方

に向き直った。

「よりにもよつて、コイツかよ……？」

「そう？天才で有名だし、オツムの方もバカの様だから使い勝手はいいのよ？」

しれつ、と沙羅は言ってくる。

いくら相手がアンダーソンだとはいえ、本人の目の前にしてよく言えるなこの女も……。

「どうやって知り合つたんだ？」

「別に私は何にもしてないわ、向こうからココを調べてやって来たのよ。あんたを探しに来たみたいよ？」

そう沙羅は言う。

そこでアンダーソンが割つて入つた。

「その通り De ス。私はクロウを探しに来たんです！」

「なんで俺を探しに来やがった？」

迷惑だ。と言わんばかりに鴉は言う。いや、実際迷惑極まらない。

「無論、安否の確認と謝罪です！」

「結構だ、返れ。ただし、金なら置いていけ」

間髪入れずに鴉は言う。

一応金なら置いていけと鴉は言うが、アンダーソンに限って金で謝罪をしに来たりはしないだろう。そもそも仕事の出来事で謝罪などという事はアンダーソンしか考えない。

「Oh……、そう言わずに give させてくだ Sa イー」

そう言つて、アンダーソンはスカジャンの懐から大きな包みを取り出した。一体、スカジャンの懐の何処にそんな物が収納出来るスペースがあつたのであろうか？

「ドラ……！」

沙羅が危険な事を口走りそうになり、鴉が身振りで止める。

そういう鴉も、あの世界でも有名な青い狸を連想してしまったのは想像にかたくない。

「わが故郷、テキサスの名物 De ス！」

そんな鴉達の様子を知つてしらすか、アンダーソンは鼻歌交じりでその包みをカンターの上に置くと、中身を取り出した。

中には観光地で売っているお菓子の菓子箱の様な箱が入っており、大きく『テキサス名物』と日本語の書体で書いてあった。

「Open--」

いや、それは正しく菓子箱であった。

アンダーソンの掛け声と共に開けられた箱の中には、日本の観光名所でもよく売ってあるものが入っていた。

もなか
「最中だ……」

「そう！テキサス名物 MONAKA です！」

コレ……本当にテキサス名物か？日本のどっかの地方がギャグで作ったんじゃないのか？

鴉がそう訝しんでいると、沙羅がその最中に手を出した。

そして、鴉にも投げて寄越す。

「コーヒーにも合うんじゃない？」

実は甘い物に目がない沙羅はそう言っつて、その最中を口に入れる。

「ササ、クロウも eat してくだサーイ！テキサス産まれの生粋の江戸っ子である私の舌に miss はありませ
ン YO--」

テキサス産生まれなら生粋の江戸っ子にはどう足掻いてもなれんぞ、と思いつつも何の変哲も無い最中の様だったので、鴉も言われるままに口に入れる。

と、先に変化が起こったのは沙羅だった。

渋い顔をしたかと思うと、何処かに行ってしまう。続いて、鴉も似たような顔をして店の外へ出て行った。

「c」

わけが分からずアンダーソンがボーツとしていると、二・三分ほどして二人が戻ってきた。

何だか、二人ともやつれた様な顔をしている。

そんな二人に、アンダーソンは喜々として言った。

「Delicious(美味)でしょう？」
『テキサス名物ステーキ
館最中は』

『テキサス名物ステーキ館最中』。その名前だけでも説明するまでも無いと思われるが、そのステーキと館

との不快なハーモニーによって生み出される味は『宇宙が見える』と、ゲテモノ食品研究家達に大絶賛を頂いた代物である。

「HAHAHA!ー喜んで頂いてヨカッター!」

そう言って、アンダーソンは笑っている。アンダーソンにはやつれた二人の顔が喜んでいる様に見えるようだ。

沙羅はその顔をゲンナリと見つめ、鴉は殺意を覚えた。

「本当に、コイツと仕事をしろと?」

「……無料だし」

沙羅は金に意地汚いだけに、無料というものに弱いらしい。口をナプキンで拭きながら『我慢しろ』と目で言うってくる。

きつと、アンダーソンにこれは正義の仕事だと焚き付けているのであろう。

沙羅の口は見てきたような嘘をこれでもかというぐ

らい話すので、アンダーソンなどイチコロだった筈だ。溜息を付く。

「いらん、返す」

と言って、鴉はアンダーソンに『テキサス名物ステーキ館最中』を返した。

「Really? 美味しいのデス ga……」

勿体ないという感じで、アンダーソンはその場でその『テキサス名物ステーキ館最中』を食べ始める。

味覚が腐っているに違いない、と鴉は確信した。

ハムハムと、妙にお行儀良くアンダーソンは『テキサス名物ステーキ館最中』を食べている。

その姿に、沙羅が怪訝そうな顔をした。

「妙に行儀が良いわね……」

「お坊ちゃまだからな」

沙羅が口にした疑問に、鴉は間髪入れずに答える。

「は?冗談?」

沙羅は訝しんだが、鴉は至って真面目に答えた。

「本当だ。こいつは米国のとある有名な実業家『CB』
の息子だ。ちなみに、金持ちの坊ちゃんらしくハーバード
大学を卒業してる」

今は沙羅にそっけなく説明しているが、鴉も向こうで
本人からその話を聞いた時には耳を疑ったものである。

「ハーバード？嘘……本当に？」

絶句している沙羅に向かって、鴉は肩を竦めてみせる。
アンダーソンが、『テキサス名物ステーキ館最中』を
行儀良く食べながら答える。

「YES、私はハーバードから博士号をgiveしました」

「ハーバードを卒業したのに……何でこんな仕事して
んのよ？」

絶句した表情で沙羅は尋ねる。もともとと言えばもっ
ともな疑問だった。

「Nu~fu、良い Question デスよ、沙羅サン」

待ってましたと言わんばかりにアンダーソンはそう

言う。例の四次元に繋がっていると思われるスカジャ
ンの懐から一冊の分厚い本を取り出した。

そう、アンダーソンの魂の聖書、『Great! 柳生十
兵衛』である。

「お前、いつもそれ持ってるのか？」

向こうでも散々アンダーソンに見せられた鴉は、げん
なりとして尋ねる。

アンダーソンは自信満々に胸を張った。

「無論でス！全二十八巻（連載中）常に携帯していま
ス。Everyday でスー」

やはり、アンダーソンのスカジャンの懐は四次元に繋が
がっていると見て間違いないようだ。

そう確信している沙羅と鴉の横で、アンダーソンは話
に花を咲かせる。

「知らない沙羅サンに explain（説明）シマスネ！こ
レは今テキサスで Very popular（大人気）なコミック

『Great! 柳生十兵衛』デス！コレはですな……」

駄目オタクらしく長く、且つ無意味な脱線や補足が多い説明をアンダーソンは約二時間渡って話してくれた。

その二時間の説明をまとめると『現代に降り立った柳生十兵衛が、アメリカの地でテキサス柳生なる剣術を操って何故かアメリカにいる日本の自衛隊（悪と称されている）などと戦闘を繰り広げる』という内容である。設定の開き直り方が、ある意味素晴らしい。

作者はアメリカ人で、部隊はアメリカであるのにも関わらず自衛隊との戦闘はあるのにアメリカ軍との戦闘は一切無いという、突っ込み所が多すぎて何処から突っ込めばいいのかさっぱり分からない漫画である。

で、アンダーソンは言う。

「私はコレに感激して正義Justiceのroadを歩もうと思ひ、

このworkをchoiseしたワケデス」

「は〜」

二時間も説明されたというのに、沙羅には『正義の道

を選ぶ→この仕事』という繋がりが分からないらしい。

実際、鴉も説明された時には分からなかったので教える。

「つまりな、この仕事が一番『Great! 柳生十兵衛』で柳生十兵衛がやってる事に近いとアンダーソンは思ってたわけだよ」

「ああ、なるほど」

それで、沙羅も納得する。

まあ、近いと言えば近いし、遠いと言えばあまりにも遠い。

「YouはUnderstand（理解できましたか）？ちなみ

に、私の名前の正義まことよし・アンダーソンというのもjusticeの道を志してハーバードを卒業した時に、justiceに因んで命名したのデスよ」

「なるほど、それで正義か……」

そこまでは知らなかった鴉が納得していると、沙羅は

別の事で驚いた様だった。

驚愕した顔で言う。

「え？ハーバード卒業後に志したって……今幾つ？何歳の時卒業した？」

「二十四で卒業し、現在二十八デス」

即答されたその答えに、沙羅だけでなく鴉も顔を手で覆った。

お互い示し合わせた様に首を振っている。

普通、鴉達の仕事は使い物に十年は掛かる。しかも、幼少からの訓練を必要とする。

「なるほど、あんた天才バカなのね」

と、一つの単語で二面性を持つ言葉を使って、沙羅は結論を出した。

*

喫茶『無道』を後にして、鴉はアンダーソンと共に爺

の工房へと来ていた。

『Crow』のメンテと、アンダーソンに真つ二つにされてしまった連射用の新しいのがどうしても必要であったからだ。

だが、相変わらず鴉に金は無い。

あの後一応沙羅に依頼料の前借りを頼んでみたのだが、今度は雑巾とバケツを渡されてしまったからである。

だが、爺は言うまでもないし、テツ坊に至ってもあの事件の後である。ツケが出来るとは思えない。

しかし、工房の扉を開ける鴉は余裕の笑みを見せる。秘策があつたのだ。

工房では、爺が一人で酒を飲んでいた。

「相変わらず汚い工房だな」

工房の中に入って、鴉はそんな風に爺に声を掛ける。ギロリと、爺の目が此方を見据えた。相変わらず、ビンから直接酒を飲んでいる。

「何だ？」

「あの連射の奴の新しいのが欲しいんだが」

酒をグビツと飲み、爺は一つゲップをした。赤い顔で鴉を睨む。

「その前に、前回足りなかった分の代金は持つてきたんだらうな？」

「あ——、鴉の旦那！」

爺が言い終えるのに重なって、奥で何やら作業をしていたテツ坊の怒声が響いた。

工具を右手に持ったままズンズンと鴉の方にやってくる。

「よお、テツ坊、丁度良かった。コイツの弾と、メンテよろしく。ツケで」

そう言つて、鴉は『Crow』をヒラヒラさせる。

テツ坊は顔を真っ赤にさせて怒った。

「旦那！一体、どの口でそんな事言つてるんですか！

ふざけるのも大概にしてください！この間はよくも裏切ってくれましたね！」

純情を見事に砕かれてしまったテツ坊は、分かりやすく怒っている。

それに対して、鴉は冷静に答えた。

「大丈夫だ、テツ坊。あれはとんでもない尻軽のアバズレだった。俺が的確に処理した」

……ホテルで。

ホテルは鴉の脳内の思考でしかないのだが、テツ坊はまるでそれを読み取っているかの様に憤慨する。

「あの後は、お楽しみでしたか旦那？良かったですね！今すぐツケ全部返してくださいよ！ほらっ、全部！返せるものならね！」

「何だ？貴様またオケラか？返れ、金稼いでこい」

テツ坊は怒鳴りながら鴉に詰め寄り、爺は呆れて新しい酒を取りに奥に向かう。

が、鴉は二人のそれらの行動を一瞬にして止める言葉を吐いた。

「分かった。払おう」

ピタリと両者の動きが止まる。すぐに爺が怪訝そうな顔をした。

「払うって……貴様、この間の依頼は失敗したんじゃないや

ないのか？」

「よく知ってるな」

そう平然という鴉に、テツ坊はさらに怒りを爆発させる。

「てめえ！じゃあ、払えねえじゃねえか！オオボラぶっこいてんじゃねえよ！」

もう、敬語すら何処かへすつ飛んでいる。

そんなテツ坊の様子を見て、鴉は嘲笑した。

「若いな、テツ坊。俺に金が無いからと言って払えないとは限らないだろう？」

「はあ？」

テツ坊と爺、二人同時に不思議そうに声を上げる。

そんな二人の様子を鼻で笑いながら、鴉は気分よく声を掛けた。

「アンダーソン、来い」

鴉がその声を掛けると、今まで入り口の外に居たアンダーソンが中へ入ってきた。

「HOー！ココが、クロウが言っていた爺サンの工房な

のでスねーYOUがテツ坊ですか？」

「Nice to meet you」などと言って、アンダーソンはテツ坊と握手を始める。

テツ坊も爺もあつけに取られていたが、鴉はその様子は無視してアンダーソンに声を掛けた。

「アンダーソン。例のヤツ、頼む」

鴉は元からアンダーソンに言い含めていたらしく、アンダーソンはすぐさま反応する。

「OK Justice正義の為ならば仕方ありません、任せてくだサイ！」

そう言って、アンダーソンは例の四次元空間のスカジヤンの懐から、大量の札束を吐き出して手近にあった机の上にドサドサと置いた。

「Justice正義の為、この money は自由にしてください！」

クロウ」

突然出現した札束に啞然としている爺とテツ坊に向

かつて、鴉は言う。

「だ、そうだ。コレで払おう」

自分の金では無い癖に、随分と堂々としたものだった。一瞬何か言い掛けたテツ坊だったが、札束の量をもう一度見直してそれを幾らか驚掴みにすると、鴉の『Crow』を受け取って奥へ向かう。

爺さんも、同様に札束を驚掴みにして奥へ消えた。連射用の予備でもあるのだろうか。

さっきまでの二人の行動が、まるで嘘のような迅速さだった。

「金は偉大な」

鴉はしみじみそう思った。アンダーソンに向き直って言う。

「お前、意外と使えるな」

「NO！意外とは心外デスYO！クロー！」

と、鴉達がそんな事を話していると、奥から声が掛かった。

「旦那、青弾を制限一杯まで撃ったでしょう？このデ

カブツ相当痛んでますよ！」

「あー、スマン。撃ったかもしれん」

「制限までは撃つなって言ってたでしょうが！」

テツ坊の怒りの声に、鴉は抜けた声で答える。

奥から、爺が鴉の連射用の銃を片手に戻ってきた。肩間に皺を寄せている。

「おい、見たが、シリンダーがかなり痛んどる。何発撃った？」

「目一杯、制限の三発だ」

「本当か？あのむやみに頑丈なデカブツのシリンダーが痛んどるんだぞ？」

鴉は肩を竦めた。『嘘付いても仕方ないだろ？』と態度で表す。

爺は舌打ちした。

「いくら頑丈とはいええ、やはりあの弾をハンドガンで撃つには無理があるか……」

「だろうな、撃つたびに肩が抜ける思いだよ」

そう鴉が答えるが、爺は皮肉って笑った。

「お前が頼むから、撃てるようにしとるんだぞ？自業自得だ」

「……違いねえ」

そう、鴉と爺は話す。

『Crow』で使われている青リムの弾は、元々『Crow』の規格に合っていない。というか、弾の内部に信管が入っているのである。ハンドガンに使っていい様な弾ではない。鴉が頼むので爺が『Crow』に合うように無理矢理作ったのである。

その為、頑丈さが取柄の『Crow』であっても制限弾数があった。三発だ。

なら三発撃って良いのかというと、そうではない。三発なら壊れないだろうという目安だ。

その為、制限弾数の三発を撃ちきるのは好ましくなかった。

「その『Crow』というGunは、爺サンが作ったの
デスKaç」

唐突に、アンダーソンが鴉達の話に割って入った。爺

が、ゆっくりと首を振る。

「無茶言うな、こんな規格外の代物作れん」

そう言つて、爺は吐き捨てる様に続ける。

「気になつて調べてみても、使っている金属の繋ぎにチタンが混じつとる事ぐらいしか分からん。繋ぎにチタンだぞ？有り得ん。分かるのは、恐ろしく頑丈なハンドガンつて事だけだ」

アンダーソンは「そうですか」と呟いて鴉の方を見た。鴉も首を竦める。

「貰い物だ。俺にも出所や材料はさっぱり。気になるのか？」

答えながら『Crow』鴉の顔が、どこか寂しげに霞んだ。が、アンダーソンはそれには気付かない。

「ええ、なにせこの『Justice 正宗』の刃を受け止めましたからね。この名刀『Justice 正宗』、使う者が使えば、例え鍛えた鉄であってもバターよろしく切り分けますよ」

そう、『Justice 正宗』の艶やかな刃を見せながら晴れ

やかに答えるアンダーソンの顔に、鴉はげんなりした顔を向けた。

「刀で鍛えた鉄をバターみたいに切ったらおかしいだろう？」

「そーいや俺も気になってたんだが、その刀誰が打った物なんだ？テキサスの鍛冶屋か？」

テキサスに鍛冶屋があるかどうかは知らないが、打った奴は相当腕が良い。

そう聞くと、アンダーソンはキョトンとした顔で答えた。

「私デス ga:c」

「何———!!!」

思わず、鴉は絶叫する。爺も絶句していた。

「ど、どう見ても名工の業物クラス……いや、それ以上の輝きを放つてるぞー！」

「お、お前……」

もう、声も出ないとはこの事である。職を間違ったとしか思えない。

爺がさらに質問する。

「鋼じゃないような気がするが……材質は何だ？」

「庭に転がっていた stone の中であつた物デス。幼少の頃、sky から降つてきまシタ」

「……」

鴉と爺が黙り込む。つまり、アンダーソンが持っている刀とは、隕石の中に入っていた宇宙原産の金属を使っているという事だ。超金属かもしれない。

「道理でダングステン弾でもビクともしないわけだ……鍛冶の技術は？」

「Comic の見様見真似デス」

鴉は深く溜息を吐く。爺は軽く首を振ると何処かに行つてしまった。

分かつていた……こんな変態だつて分かつてはいたんだが……。

鴉は、アンダーソンについて深く考える事を止める事にした。身が持たないという事に、今さながら気がついたからだった。

